生をするといふのが所謂他力である、そこで自力と他力とは餘程振合ひが違ふのである。尙ほ此の他力といふ事を平たくいへは斯る淺間しき者が佛樣の力一で助けらるゝ事ぞと、自身といふものを見ずして佛の力一つを見るやうになつたのが他力の信心と云ふものである。是れまで見えなんだ處の佛の光が初めて佛の力に依つて我々が見せて貰ふ事になるので、佛の力が見える事になつたから我々の小さい方へは目が着かぬ事になつて了つて、我々の小さい自分と云ふ側には目を着けず、大きな佛樣の力一つに目が着いて、其の力に依つて救はれる事になつたのが他力の信仰、詰り前に申した自力の方の信仰と理窟の上から云ふと同じ事になる。自分と云ふものは其處で棄てゝ了ひ、乃公と云ふものは其處で無くなつて了つて居る。佛の大慈大悲と云ふ大きな力に目が着いて、そこで其の他力で佛になるといふ事が出來るのである。淨土へ往生して佛になると云ふ事は其處から出來るのである。乃公と云ふ根性のすたつて居らぬ以上は

淨土へ往生して佛になるといふ事は出來ない。他力の信仰といふは、乃公と云ふ根性を棄てゝ了つて自身と云ふものを宛るで無くなつて、凡夫の計らひ自身の思惑はスッカリ打ち棄てゝしまねばならないのである即ち佛の大慈悲に我等の身心を任せて少しも佛の力を疑はない樣にするのが一番肝要である。佛の語には一寸の虛言がない事を信ぜねばならないのである。親鸞聖人は全く阿彌陀樣の御代官として敎化なされた法然上人を信じて疑はれなかつた事卽ち全く彌陀佛の御力に縫つて御出になつた事は親鸞聖人の歎異鈔によりて明かである。即ち左の如である。

『おの〳〵十餘箇國の境を越へて、身命をかへりみず尋ね來らしめ給ふ御志、偏に往生極樂の道を聞かんが爲なり、然るに念佛より外に往生の道をも存知し、又た法文等をも知りたるらんと、心にくゝおはしまして侍んは大なる誤りなり。若し然らば南都北嶺にもゆゝしき學生達多く座せられて候ふ

なれば、彼人々に逢ひ奉りて往生の要とく〳〵きかるべきなり。親鸞におきては念佛して彌陀にたすけられ參らすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずる外は、別に仔細なきなり、念佛はまことに淨土に生るゝたねにてや侍らん、また地獄に落つべき業にや侍らるらん。總じてもて存知せざるなり。法然上人にすかされまゐらせて念佛して地獄に落ちたりとも、さらに後悔すべからず云々。』

との給うてある。是は聖人が生死の解決を得んがために、遠方より我れも我れもと、坐下に集り來れる人々に對して、自分の實驗信仰を告白し給ひしものである。聖人の信仰のいかに純粹なるかは是にても分明である、さうであるけれども是は聖人の隨自意を、腹心の聞法者に向ひて垂れ示されたものであつて、もし未だ此の實感に達せない求道者に向ふては、他力教義を理論に訴へ、言語文字にあらはして他を誘ひ引き、教義を守護する方便としてある。それで今他

因と他力について一言述べよう而して聖人の教意を說明しよう。聖人の語に。

『若行若信無有一事非阿彌陀如來淸淨願心之所回向成就非無因他因有也』

との給ふてある。是は彌陀如來の廻向し給ふ信心を因として、往生の大果をうるといふは、正因果の法であつて、無因外道や他因外道の所屬ではないとの給ふのである。然るに一往の所見にては、凡夫は全く罪惡の外なきを以て、因も緣もみな彌陀如來の廻向によりて往生の果を得るといへば、他因自果の如く、又た凡夫の上のみを見れば、爲因得果の如く見える。安心決定鈔に覺如上人は左の如く書いてお出になる。

『願行は菩薩の所にはげみて、感果は我等の所に成ず、世間出世の因果のことはりに超異せり。』

との給ふもの、他因自果を以て別途の眞宗教義とし給ふ如く、御一代聞書に蓮如上人は

『人の辛勞もせで德をとる上品は、彌陀をたのみて佛になるにすぎたることなし。』

と給ふものは、無因得果を宗意とし給ふ樣である。「大乘義章」に說かれたる

『佛法之中、無他作自受、又、無自作他受、只、是自業自得果』

といふのに對照すれば、眞宗敎義は自業自得の佛敎の因果律の抵解せる、他因外道無因の所屬のやうにて、聖人の此二外道に非ずと簡異し給ふもの、甚だ了解に苦しむ樣である然し例へばある慈父が愛兒に與んがために苦辛經營して、財產を積みて之を無能の兒に與へて、金滿家たらしむるが如く、彌陀如來が法藏比丘たりし昔凡夫のなす所の行は自力難成の故に、大悲代受苦の心を以て我等がために御辛勞ありて、正定業たる本願名號を成就し給ひ、之を凡夫に廻向し給ふ。故に凡夫は積まずして積みしいはれとなり。爲さずして爲したるいはれとなりて往生する。故に信心によりて往生をうるといふも是れまた自業自

得果の道理に違ふ事なしといふてある。

吾人はかくの如く信じて居るのである。さりながらその大悲代受苦といふ、根本の敎理は如何なるものであらうか、親が子のために財產を作るといふは、財產や品物は正報ではなく、因緣さへあらば誰にでも附着し得べき共業感のもの故、かくの如き事は勿論あるべき理なれども、正報の果體別業感のものは、必ず自業自得でなければならぬ。

第四節　罪の自覺と喜び

罪を犯してそれを自覺するよりも、輪廻轉生とか、永劫墮獄とかといふ事について御說きなされた佛說に對して非常に恐れを懷き、その怖れを早く自分の身心から除きたいといふ心から、終に佛の道に歸して、懺悔して、安心の中に世を送るといふ人は昔から多いのである。德川時代に出來た小說、淨瑠璃、謠曲などを見ると其の例が多く解せられるのである。罪惡とは如何なるものかと

いへば、殺人强盜放火などは、罪惡である事は法律にもきめてあり、世間の人も罪人よ罪人よとよんでゐるので一番わかりやすいのである。此れらの罪惡をなして反つて面白がる人でも、一度佛のありがたい御敎の法に觸れ、良心の光りが耀いて、罪惡の眞相を自から認める樣になり、心の底から悔ひ改め樣といふ氣になつて、佛の敎を窺ふ樣になり、自然に慈悲の光明によりて、頗る强く自分の罪惡を感じ覺えるのである。

例へば、彼の遠藤武者盛遠の如きは又法然上人の御敎義によつて今までの總ての罪惡を自覺し懺悔して、御弟子となつた武藏の熊谷次郎直實の樣に、或は雷のお新や、今天一坊の類、其他現代に於ても非常に多く實例がある。然し吾等は其の樣な罪惡はなさないから、別に自覺や懺悔する必要がない樣に考へられるかもしれないが、以上にのべた事ばかりか罪惡でないのである。僞善も一つの罪惡である。それで吾等は毎日に大にせよ、小にせよ罪惡をなしてゐるので

ある。その罪惡といふ事について、自覺せず反省せない樣な事では、其の人は眞實に惡人である事に氣がつかないのである。從つて佛の御慈悲を知らうとする人でないのである。成る程我は信後と雖も信前と同じく罪惡を造りつゝあるのである。然し大悲の親樣の呼聲によりてからといふものは懺悔の念が伴ふのである。

其の懺悔の念は佛の眞實心から湧き出るものであるから、我等の僞らぬ心から出るのである。一朝我が心に懺悔の念が起ると知らず〳〵佛名を稱へるのである。即ち佛は吾等に六字の名號を授けて、犯した罪惡に對して悔み改めさせ而しで必ず感謝と喜びの念を懷かしめられるのである。即ち六字名號は、一つは罪惡に對しての懺悔と、佛に對しての感謝である。此の二つ共に彌陀の慈悲によりてだと心得させて頂いた以上は、吾等は尙々ありがたく日を暮らさせて頂かねばならない。

第五節　攝抑の二門

佛の救濟の目的は、惡人を相手とせられ、如何なる惡人でも助けねばやまぬとの御慈悲である。然るに、攝抑の二門が設けられてある。卽ち攝取門と抑止門とである攝取門といふのは佛は御慈悲を以て、此の一切衆生を救ふと云ふ事を顯はす言葉で抑止門といふは抑へ止めると書いて、どの樣に救ひたいと思ふても佛の智慧のある事や大慈大悲を以て我等衆生に向つてお出になる事や、其の他の色々の大願力を疑ひ、佛樣の法を謗り又父を殺し、母を殺し、羅漢を殺し、和合僧を破り、佛身より血を出すといふ樣な仕業をなす罪人、尙又大乘にいたつてはそればかりではない、なか〳〵五逆をなす樣な心違の者は如何に大悲の御心あるとも、助ける譯には參らぬといふのが抑止門である。故に「大無量壽經」の上卷には、

『唯だ五逆と正法を誹謗する者は除く』

と仰せられてある。然らば無限の大悲に傷がつきはしまいか、しかも「觀無量壽經」の上を見ますと、下品下生の文に曰く、

『十念を具足して、南無阿彌陀佛と稱せしめ、佛名を稱するが故に、念々の中に於て、八十億劫の生死の罪を除く』

と仰せられて、五逆者も又た、殺生、偸盜、邪婬、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋恚、愚痴の十惡を犯す者さへも、念佛すれば必ず往生する事が出來ると說いてある。一方で除外されたる五逆者は、一方では攝められてある。卽ち前者と後者は大矛盾がある樣に感ぜられるが、此の問題に付いては、多くの高僧方は種々な解釋をしてお出になる、善導大師の意見によると、大經に五逆と正法を誹謗する者とを除くとあるのは、此の二大罪惡は輕からぬ罰を受ける源因なれば、佛樣は大智慧を以て、吾人に此の五逆なり正法を誹謗する心を止めさせる考からして、方便して止められ往生は出來ぬぞといはれたのである。で

あるから佛様は我等の如き造惡無善の凡夫を絶對的に攝取せぬといふのではない、故に觀經には、五逆十惡のものでも、南無阿彌陀佛を稱ふるならば必ず佛の大慈大悲の御光明に照らされて極樂淨土に參らさせて頂く事が出來る。そして逆法の者も回心改悔すれば、目出度往生する事が出來ると御說き遊ばされたのであると云ふてある。これによつて見れば未だ造らない罪に對しては、抑止として之を除き、已に造つた罪に對しましては佛の眞實救濟の御精神から、之を攝取せられるのであると窺はれるのである。若し大經の上に抑止の御誡がなかつたならば、佛の慈悲中に常に忘れ給はぬ衆生は如何なるものであるかが知れない。されば佛は特に方便してこの抑止を設けられた御眞意は吾等衆生をして、逆謗の身たる事を知らしめ、無有出離之緣の者たるを、思はしめたいとの佛智によるのである、而してその五逆十惡謗法の罪人たる吾等こそ、攝取して捨て給はぬ佛の救濟の正機である事を觀經において述べられたのである。

親鸞聖人の御作御本書の信卷に

『涅槃經に曰く、世に三人あり、其の病治しがたし、一には、謗大乘、二には、五逆罪、三には、一闡提なり、是の如きの三病は、世の中に極めて重し、悉く聲聞緣覺菩薩の能く治する所にあらざるなり。是を以て今大聖の眞說によるに、難化の三機、難治の三病は、大悲の弘誓をたのみて、利他の信海に歸すれば、これを矜哀して治し、これを憐愍して療し給ふ。例へば醍醐の妙藥の、一切の病を治するが如し。濁世の庶類、穢惡の群生、金剛不壞の眞心を求念すべく、本願醍醐の妙藥を執持すべきなり』

と述べてある。即ち吾等凡夫が佛様に對して何が一番大切であるかといふと。平生能く聞いてゐる通り、佛の慈悲の心即ち佛の誠の心を疑ふ心を去るのが肝心であつて、愈々疑といふものはどこまでも邪魔であるといふので、折伏門の抑止が必要ともなるが疑の心なくならばそれこそ一番よいのであるそれだから

多くの仕事を致すに付いても疑を止めて誠の心に立戻らねばならない。これが確かであつて見れば、それが信心であるから。其の信心を以て佛の境界に至り着くと自由自在の働きが出來る。最早往先が極つた上からは一足一足に我足許に氣を附けて往かなければならぬ。たとひ死んだ後は火の消えた如くであらふといふ樣な亂暴を云ふ人でさへも、生涯の道を歩くに就ては一足一足、氣を付けねばならぬ。今生きて居る其間に間違ひなく佛の誠を信じて、我心の往先が定まつた上は、方角が確かで一足一足進んで行くのであるならば宜しいが、間違つたならば、直ちに恐ろしい所へ行かねばならぬ、さう云ふ次第であるからして、自分自分心の履んで行く道の方角を、今こそは佛の誠の心に眞面目に我心が向つて居るなれば、一足一足といふは明日を待たず、今晩までも待たず今之を讀んですぐ身體に行ひ心に思ひ口に出すのを一足一足といふのである。往先のむかひばかりを見ては、今日只今人間といはれるやうな日送りさへも出

來ぬ、嘘僞をいつたり人の惡口をいつたりする樣な根性では駄目であるから、そんな心は此の場で逐ひ出して仕舞はねばならぬと氣づかれてくるのである。

第八章　六字名號論

第一節　其名號を聞きて

聞其名號といふのは、「無量壽佛」の威神功德不可思議を聞く事である。凡そ諸佛如來の名號を稱へて廣大なる滅罪の利益のある事は、「地藏本願經」にも明に說いてある。又十住毘婆沙論には、

『十方三世の諸佛皆稱名の利益を說き給ふ』

といふ樣な意味の事が書いてある。故に法藏比丘が、我は世に超ゆるの願を建つと說かれたのである。世に超ゆるとは十方三世の諸佛に名號の利益を以て衆生を救ひ給ふ佛は非常に多くさんあるけれども、別して阿彌陀如來の御名號は世に超えたる名號であるからして、名聲十方に超ゆと誓せられ、是によつて十方諸佛皆共に讃嘆し給ふのである。是を唯信文意に、

『此の佛の御名は萬の如來の名號に勝れ給へり是即ち誓願なるが故なり。』

とある。其の名號の威神功德は今第十八願の成就に顯はれ給ふ信心歡喜の一念に卽得往生の利益を得るのである。又曰く、

『一切衆生をして無上大涅槃に至らしめ給ふ大慈大悲の誓の御名なり。』

とある。それで我等は此の頓極頓速威神功德の不可思議は如何に彌陀如來が大願を成就し給ふとも、十方諸佛が皆一緒に讃嘆せられなかつたならば、如何にして此第十八願成就の卽得往生、住不退轉の大利益を信ずる事が出來ようか。幸に十方諸有の諸佛諸佛弟子が讃嘆せられたによつて、吾等凡夫までがよく知る事が出來る樣になつた次第である。で第十七の願に、

『十方世界の無量諸佛、悉く咨嗟して我が名を稱せずは、正覺を取らじ。』

と誓ひ給はれてある。名とは何んであるか觀經によつて見ると確かに南無阿彌陀佛の事である。此の名號を充分に說き聞えさせられたのは光明大師である。

そこで、聞其名號といふは只よい加減に聞くのではない、善知識にあうて、南無阿彌陀佛の六字のいはれを、よく聞き開けと仰せられるのである。さて此の名號は何によつて成せられたのといへば、勿論因位の本願によつて成せられたのである。であるから敎行信證信卷には、『聞其名號を釋し給ひて、衆生聞佛願生起本末無有疑心是曰聞也』とある。然れば本願は名號で、名號は本願なる事は充分に知得られるのである。卽ち因に約すれば、本願、果に約すれば名號である。卽ち第十八願たるや體は卽ち南無阿彌陀佛である。之を御文章に、

『南無阿彌陀佛といふ本願を立てましまして、』とある。此の本願を喜び信ずるといふも、南無阿彌陀佛を離れては信ず事は出來ないのである。故に聞も名號信ずるも名號、稱へるも名號、皆名號づくめである。かゝる不可稱不可說不可思議の名號は、彌陀か五劫の御思案より案じ出されたものであつて、實に持ち安い稱へ易い名號である。

さて其名號の三字について解釋を試みたが、更に聞の一字について解釋しやう。さて聞の一字を分別すれば此の第十八願の成就文は、相手は十方諸有の惡人女人であつて、法は卽得往生住不退轉の益を得せしめ給ふのである。さて無上甚深微妙の法であるければ、百千萬劫の衆生がかゝる不退轉なんどといふ位に至る筈のない身の上であるにかゝはらず、信心歡喜との給ひたれば、一念の所にてはや佛になる身となりて、安堵して喜ぶ事の出來るといふ廣大な理由がどこにあるかといへば、只此の聞の一字である。よつて祖師聖人は、信の卷に聞の釋をなされ、代々の善知識が御相承遊ばされて、他力本願のいはれば、聞を以て最も大切とする道理を述べられたからして、吾々は此の聞の道理を分別せねばならない。先づ總じて如來一代五十年の說法は佛自ら證り給ふた法を說聞しめんが爲である。佛には六塵の說法と申して、眼に佛を拜ませ、身に光明をふれ鼻に妙なる香をかがしむる迄、皆衆生に佛法を證らさせる說法であつて、

一切諸佛の種々の方便を以て說法し給ふのである。然るに此の娑婆世界は耳で聞いて智慧を生じ而して證りを得る國である。であるから佛は五十年間大獅々吼遊ばしたのである。夫れに就て外道と佛法の差別が知られるのである。諸の外道の敎は本自分の邪思惟、邪分別から法を立てる。又其の弟子等はみな、邪師邪敎に從ふばかりである。天竺即ち印度の外道は皆禪定を修し諸法の生滅を觀察し、各自分の見に從うて義を立てる。佛の敎は三世十方の如來皆前佛の敎を傳へ給ふより外はない。然れども只敎を傳へ給ふのでなく、諸佛の證り顯はし給ふた樣に、又自分自身から證りを開かせられて諸佛の法の樣に證り顯はし給ふたのである。其の佛の證りの境界を證らない凡夫の心に聞く事であるあら、決して決して聞くところの法を疑ふ樣な心が微塵もあつてはならない。少しでも疑心があつては、一句も聞き得る事が出來るものではない。「智度論」に、

『「佛法大海には信を以て能入と爲す』

とある。即ち吾々が疑心なく佛法を聞きて信ずるより外にないのである。即ち聞其の名號の聞の字は聞いた上に思惟觀察し分別修行して證り顯はすのではなく、只聞きうるばかりにて他力の信を得、直ちに即得往生の利益をうるのである。三界の業煩惱を斷じたる、阿羅漢さへも未來遠劫の末の成佛であるのに、今日末斷惑の凡夫が臨終一念の時に大般涅槃を得るといふのである。此處が他力の權威のある所である。他力即ち本願即ち南無阿彌陀佛の六字、此の六字を聞くに依つて不思議なる妙果を得る事になるのである。

かゝる不思議微妙の聞其名號の名號であるからして、十方恒沙の諸佛方が聲を揃へて不思議と賞せられるのである。是即ち聞く所の名號が超世無上の法門であるからして聞く聞の字も一代の佛の經典にためしのない超世の聞である。故に祖師聖人は「聞の一字は信心をあらはすなり」といはれたのである。是れ即ち其名號を聞きてなる大文字の眞意義である、して見れば、「本願成就文」に

現はれたる聞、其名、號の四字は決して輕卒に見る事は出來ないのである、然らば其名號と云ふ意味は如何であらうか、更に節を改めてを說くことゝしやう。

第二節　御名號の意義

前節に述べた名號は即ち六字である。南無阿彌陀佛の六字を信ずるのが聞其名號といふ意味になるのである。然らば此の六字の名義をたゞさねばならぬ。

抑も南無阿彌陀佛とは、もと彌陀が因位永劫の間に、萬全を修められ、萬德を行はせられ、淸淨眞實を以て成就し給ふたもので。彌陀の方でいへば是は果號である。然しながら彌陀の願意からいへば、六度十波羅密等の餘行餘善を選び捨てゝ此の果號である南無阿彌陀佛の六字名號を稱へる者は。たとひ一度ならうとも十度ならうとも、必ず彌陀の大慈大悲を以て、吾等を救濟せずはやまぬといふ事を誓はせ給ふのであるからして、衆生の方からいへば、此の果號は

彌陀の誓願に順ふて、稱念すべき法體である。そこで此六字を行と名づける。行とは進み趣くといふ意味であつて、もと彌陀如來が因位にあつて造作進趣せられた果號であることは前述と同じである之を稱へれば往生の果位に進趣するもの故に行と名をつけるのである。實に吾等が往生し得る事の出來る正しい業因は、唯是れ一つの南無阿彌陀佛の名號にあるのである。念佛の德は、餘行に勝れ、且つ行じ易いからして彌陀は之を選びとりて往生の正業となされたのである。具足煩惱の凡夫である所の吾等が容易に安養の世界である極樂淨土に往生し得るは、此の理由があるからである。源信僧都、源空法然聖人が往生の業念佛爲本と申されたのは、此の意である。

然しながら此處に眞宗一流の肝要は、唯徒らに口に任せて、六字の名號を唱へるのではない。又行者の意志を勵まして稱念の功を賴みにするのではない。偏に本願の力に隨順する信心を以て專要とするのである。曇鸞大師は如實修行

を釋して、徒らに稱名するとも疑心自力の稱念は名號の義理に相應せぬところの不如實修行である。他力信心の稱名は名義に相應してをるから如實修行である。我が淨土眞宗は不如實修行を誡めて、如實修行を勸めてゐる事は、蓮如上人によつて充分に知り得られるのである。

『世の中に人の遍く心得置きたる通は、只聲に出して南無阿彌陀佛とばかり稱ふれば、極樂に往生すべき樣に思ひはんべ　。夫は大きにおぼつかなき事なり。』

と敎えられたのである。名號の意義を解せずして、唯南無阿彌陀佛とのみ稱へたからとて、往生する事が出來るものではない。是に依て六字の意味を知らねばならぬといふので、六字を懇に釋していはれるには、

『當流の安心の其の姿を顯はせば、乃ち南無阿彌陀佛の體を、能く心得るを以て、他力の信心を獲たる人とはいはるゝなり。』

とある。是れ乃ち名號の中に、信心のある事を示し給ふたのである。されば他力の大信心を獲んと思つたならば、名號の意義を知らねばならない。然らば名號は如何、御文章に此の名號の本據を示して曰く、聞其名號信心歡喜といひ、天神菩薩は一心歸命盡十方無碍光如來といひ、善導大師は、『念佛の衆生をみそなはし攝取して捨て給はざるが故に阿彌陀といひ、』又、『南無といふは歸命なり。亦發願廻向の義なり。阿彌陀佛といふは即ち是れ行なり。斯の義を以つての故に必ず往生を得』と釋せられたのである。さて此の名號は阿彌陀の本願なる事は再三再四述べたが、御文章によりて示せば、

『夫れ五劫思惟の本願といふも、兆載永劫の修行といふも、只我等一切衆生をあながちに、助け給はんが爲の方便に、阿彌陀如來御辛勞ありて、南無阿彌陀佛といふ本願をたて給ふなり。』

とある。即ち因位の本願が即ち南無阿彌陀佛である。そこで以前に、南無阿彌

陀佛といふ名號は果號であるといつたのは、御文章に、

『迷の衆生の、一念に阿彌陀如來を賴み參らせて、諸々の雜行をすてゝ、一向一心に彌陀をたのまん衆生を助けずんば、吾正覺ならじと誓ひ給ひて南無阿彌陀佛となりまします』

とある。衆生を往生せしめなかつたならば、佛にはならじと誓ひ給ひ。其の正覺の成就したるが故に、南無阿彌陀佛となりしとあれば、名號成就か即ち正覺成就である。正覺成就が即ち南無阿彌陀佛であるければ、正覺の果號を、南無阿彌陀佛といふのである。此の意味を明白にせられた文章は、左の樣である。

『かるが故に、阿彌陀佛のむかし法藏比丘たりし時、衆生、佛にならずは、わしも正覺を取らじと誓願し給ふとき、其正覺すでに成じ給へし姿こそ、今の南無阿彌陀佛なりと、心得べし。是即ち我等が、往生の定まりたる證據なり』

とある。即ち一名號を成就せんが爲にかような誓があるのであつて、遂には正覺を成せられしが故に、南無阿彌陀佛となり給ふたのである。即ち此の南無阿彌陀佛なる名號は、因位の本願であつて、又正覺せられた果號であるといはねばならぬ。此の樣に名號は即ち正覺の成就の證據である。であるからして此の名號には佛果を得るに必要な、即ち自力修行の際に於ての諸善萬行は悉く具してゐるのである。そしてしかも此の諸善萬行に勝る權威のある事は再三再四以前に述べた通りである。此のいはれを以て、此の名號を信じ此の名號を稱へるものは往生ずる事が出來るのである。そこで此の名號は信心の體となるのである。是を所信位の名號といふのである。名號を此の位に於て談ぜられたのが即ち第十七願位であつて聖人の行卷に解かれたのは即ち是である。御文章には次の樣に書いてある。

『夫れ南無阿彌陀佛といふは、乃ち是れ念佛行者の安心の躰なりと思ふべし』

とある。安心の體が、南無阿彌陀佛の六字であると解すのは、名號が即ち安心の所依體なる事を示すのである。或は亦曰く、

『さて南無阿彌陀佛といへる行躰には、一切の諸神諸佛諸菩薩も、そのほか、萬善萬行も悉く皆こもれるが故に、何の不足ありてか諸行諸善に心を止むべきや。既に南無阿彌陀佛といへる名號は、萬善萬行の總躰なれば、いよ〳〵たのもしきなり

とある。即ち諸〳〵の善本を攝ずるといふ意味である。斯の樣な功德をもつてゐる名號であるからして、安心の躰とも信心の躰ともいはれるのである。されば、信心といふも安心といふも、全く此の南無阿彌陀佛の六字の名號を信ずる事である。故に能所を以て分別すれば、名號は第十七の大行にして、信心は第十八の大信である。然れども其の信心たるや、元と凡夫自力の心でない。佛回向の信心である。故に信心〳〵亦六字の外に出ないのである。されば「御文章」に次の

樣に書いてある。

『されば南無阿彌陀佛と申す躰は、我等が他力の信心を得たる姿なり。此の信心といふは、此の南無阿彌陀佛のいはれを、あらはせる姿なりと心得べきなり』

とある。或は又曰く、

『抑も南無阿彌陀佛の躰は、乃ち我等衆生の、後生助け給へと賴み申す心なり。』

とある。されば名號六字の法字にあるを、所信の名號といひ、大行といふ。其の名號行者の心中に印現したのを、信心とはいふのである。であるから行者心中の信心は、名號の外の者ではないのである。そこで名號即ち信心といふのである。其の事は蓮如上人御一代記聞書に、

『彌陀をたのめば、南無阿彌陀佛の主になるのである。南無阿彌陀佛の主に

なるといふは信心を得る事なり。』

とある。即ち南無阿彌陀佛の主になつた外に、別に信心はないのである。信心を獲るといふは、即ち南無阿彌陀佛の主になるといふ事を示すのである。六字が全く信心であるとすれば、助け給ふは、如何なる御方の用であるかといふとそれには先づ二字と四字に分解して。釋を施こす必要がある。元來南無阿彌陀佛なる六字の御名號は、行信因果、不離不二の法であるければ、採つて因とすれば、因行となり、果とすれば亦果號となるのである。又取つて行とすれば所信位となり、採て能信位とすれば信心となるであるから二字と四字とを分釋すれば、亦其の主とする所が解る。中興上人は御文章に、

『南無阿彌陀佛といふは、如何なる心ぞといへば、南無といふ二字は、卽ち極樂へ往生せんとねがひて、彌陀をふかくたのみ奉る心なり。さて、阿彌陀佛といふはかくのごとく、たのみ奉る衆生を、あはれみましまして、無

始億却よりこの方の、おそろしき罪とがの身なれども、彌陀如來の光明の緣にあふによりて、ことごとく、無明業障の深き罪とがが忽ちに消滅するによりて、すでに正定聚のかずに往すかるが故に、凡身をすてゝ、佛身を證するといへる心を、すなはち阿彌陀如來とは申すなり、されば、阿彌陀といふ三字をばおさめ、たすけ、すくふとよめるいはれあるが故なり。』

とある、又曰く

『まづ南無といふ二字は、いかなる心ぞといへば、やうもなく彌陀を一心一向にたのみたてまつりて、後生助け給へと、二心なく信じまゐらする心を即ち南無とはまうすなり、つぎに、阿彌陀佛といふ四字は、いかなる心ぞといへば、いまの如くに、彌陀を一心にたのみまゐらせて、疑ひの心のなき衆生をば、必ず彌陀の御方より、光明を放ちて、てらしましまして、其の光の中におさめをき給ふて、さて一期の命つきぬれば、かの極樂淨土へ

送り給へる心をすなはち阿彌陀佛とはまうすなり。

此の南無といふ二字は、衆生の、阿彌陀佛を、一心一向にたのみたてまつりて、たすけたまへと思ひて、餘念なき心を歸命とはいふなり。つぎに阿彌陀佛といふ四の字は、南無とたのむ衆生を、阿彌陀佛のもらさず救ひ給ふ心なり。此の心を即ち、攝取不捨とは申すなり。

南無阿彌陀佛と申はいかなる心ぞなれば、まづ南無といふ二字は、歸命と發願廻向との二つの心なり。また、南無といふは願なり。阿彌陀佛といふは行なり。されば雜行雜善をなげすてゝ、專修專念に、彌陀如來をたのみたてまつりて、たすけたまへと思ふ歸命の一念をこる時、かたじけなくも遍照の光明をはなちて、行者を攝取したまふなり。此の心すなはち、阿彌陀佛の四の字の心なり。

南無の二字は、衆生の阿彌陀佛を信ずる機なり、次に阿彌陀佛といふ四の

字のいはれは、彌陀如來の、衆生をたすけたまへる法なり。此のゆへに機法一體の南無阿彌陀佛といへるは此の心なり。

南無の二字は歸命の心なり、又發願廻向の心なり、此のいはれあるが故に南無と歸命する衆生を、必ず攝取して、すて給はざるが故に、南無阿彌陀佛とは申すなり。

善導釋して曰く、南無といふは即ち是歸命なり。亦是れ發願之義なり。阿彌陀佛といふは、即ち是れ其の行なりといへり。南無と衆生が彌陀に歸命すれば阿彌陀佛の其の衆生をよくしろしめして、萬善萬行恒沙の功德をさづけ給ふなり。此の心即ち阿彌陀佛即ち是れ其の行なりといふ心なり。この故に南無と歸命する機と、阿彌陀佛のたすけまします法とが、一躰なる所をさして、機法一體の南無阿彌陀佛とまふすなり。

南無といふ二字は、即ち歸命といふ心なり。歸命といふは、衆生の阿彌陀

佛後生たずけたまへと、たのみたてまつる心なり。また發願廻向といふはたのむところの衆生を、攝取してすくひ給ふ心なり。是即ちやがて阿彌陀佛の四字の心なり。さればわれら如きの愚痴闇鈍の衆生は、なにと心をもち、また彌陀をば何とたのむべきぞといふに、もろ〳〵の雜行をすてゝ、一向一心に後生たすけたまへと彌陀をたのめば、決定極樂に往生すべき事さらに疑ひある可らず。此の故に南無の二字は、衆生の彌陀をたのむ機の方なり。また阿彌陀佛の四字は、たのむ衆生をたすけ給ふかたの法なるか故にこれすなはち、機法一體の南無阿彌陀佛とまうす心なり。

南無の二字は、衆生の、彌陀如來にむかひたてまつりて、後生たすけたまへとまうす心なるべし。かやうに彌陀をたのむ人を、もらさずすくひ給ふ心こそ、阿彌陀佛の四字の心にてありけりとおもべきものなり。

南無の二字は歸命の心なり。歸命といふは、衆生の、もろ〳〵の雜行をす

てゝ、阿彌陀佛後生たすけ給へと、一向にたのみたてまつる心なるべし。

此の故に衆生をもらさず、彌陀如來のよくしろしめしてたすけまします心なり。これによりて南無とたのむ衆生を、阿彌陀佛のたすけまします道理なるが故に南無阿彌陀佛の六字のすがたは、すなはち、われら一切衆生の平等にたすかりつるすがたなりと知らるゝなり。

南無といふ二字の心は、諸〳〵の雜行をすてゝうたがひなく、一心一向に、阿彌陀如來をたのみたてまつる心なり。さて阿彌陀佛といふ四字の心は、一心に彌陀に歸命する衆生を、やうもなくたすけたまへるいはれが、すなはち阿彌陀佛の四の字の心なり。』

以上に書き連ねたのは皆「御文章」であるが、其の文の上から見ても大同小異で其の意義からいへば同じ事である。そこで二字と四字にわけるも、六字其の儘も意味に於ては變りはないのである。假りに二區分にて、解釋せば、始めの

二字は機で、後の四字は法である。そして不離不二なる事は、古歌の

たのませてたのまれたまふ彌陀なれば
たのむ心はわれにおこらじ。

によつて充分に解する事が出來るのである。即ち機法一體なのである。六字名安心定號（南無―願・歸命―たのむ（機）所信（法）能所相應得（阿彌陀佛―行―光明―たすける（法）能信（機）機法一躰御文章には機法一體である事を六箇所に出してある。其の中二個所は佛心凡心一體について二箇所出てゐる。即ち。

『一念歸命の信心をおこせば、まことに宿善の開發にもよほされて、佛智より他力の信心をあたへたまふが故に、佛心と凡心とひとつになるところをさして信心獲得の行者とはいふなり。』

とあつて、吾人が六字の御名號を稱へる時には機（吾人）と法（阿彌陀）とが感應同交して一體になる旨を說き示してある。吾人は更に進んで機法一體の原

理に就て述べねばならないのである。

第三節　機と法との一體

佛心と凡心とが一體に成るのが、機法一體の親鸞の教理であつて、凡心は信心によつて佛心と一體なる事が知る事が出來るのである、尙さらに講究するに試みに三門を分つのである。一には相承、二には名體、三には義相である。

第一相承

總じて佛教では相重血脈といふ事を非常に重んずるのである。殊に我が淨土眞宗では七高僧などを立てゝ、次第相承を重んずる事は、誰もよく存知してゐる所である。親鸞聖人も、三國の祖師方は此の一宗を建てられたるものにして決して親鸞一人の計にて、此の宗を立てたのではないと、仰せられてゐるのによつても、充分に解せられるのである。尙改悔文には『此の御ことはり聽聞申しわけ候こと、御開山聖人御出世の御恩、次第相承の善知識のあさからざる

御勸化の御恩』云々とある。眞要抄にも、白道の兩喩、信心と願心と、一つなる事を顯はし終つて、未來の衆生の、淨土に往生すべき因をは、願行悉く成就したまひき、其の理りを聞いて、一念了解の心起れば、佛心と凡心と、全く一つになるなり。とあつて相承といふ事を明かにしてをられる。

第二名體

佛心とは佛の心である。凡心とは凡夫の信心である。

信心の體とは何んであるかといふに南無阿彌陀佛である事は。御文章によつて充分に伺ふ事が出來るのである。凡夫の信心も其の體は南無阿彌陀佛である。御文章に『一流の安心の體といふこと、南無阿彌陀佛等、信心決定すといふ體は、即ち南無阿彌陀佛の六字のすがたなり。尙又、南無阿彌陀佛の、六の字の心を、心得わけたるが、即ち他力信心の體なり。』とある。

尙又、「末燈鈔」には次の如く云うてある。

『滅度をさとらしむと候は、此の度、此の身の、終はり候はんとき、眞實信心の、行者の心、報土にいたり候ひなば、壽命無量を、體として、光明無量の德用、はなれ給はざれば、如來の心光に一味なり、此の故に、大信心は佛性なり。佛性すなはち、如來なりと、仰せられて候ふやらん。此は十一二三の御誓なりと心得られ候。』

「唯信文意」には次の如く云うてある。

『此の信心は、攝取の故に、金剛心となる。是は念佛往生の本願の三信心なり、觀經の三心にはあらず。此の眞實信心を、世親菩薩は願作佛心とのたまへり。是淨土の大菩提心なり。しかれば此の願作佛心はすなはち度衆生心なり、此の度衆生心と申すは、即ち、衆生をして、生死の大海を渡す心なり。此の信樂は、衆生をして、無上大涅槃にいたらしめ給ふ心なり、此の信心、即ち大慈大悲の心なり。此の信心即ち佛性なり。佛性即ち、如

來なりとある。』

以上の文意によりて、凡心、佛心共に一體なる事が知られたわけである。

第三義相

御文章に、『たすけんといふ誓願を起し給へり。深く信じて、一念歸命の信心をおこせば、まことに宿善の開發にもよぼされて、佛智より他力の信心を與へ給ふが故に、佛心と凡心と、一つになる』等との給ひて、佛智より信心を與へるが故に、一つとなる事を得、若し佛智より與へない時は、長く一つになる事が出來ないのである。眞要抄に、此の理を聞いて、一念の了解起れば、佛心と凡心と一つになるとある。元來凡夫の樣な惡い心と、佛樣のようなよい心が一つになるといふは、何となく不思議に感ずる樣であるけれども、凡心は惡い心といふ意味ではない。惡い心は何であるかといへば、いふ迄もなく自力の心である。決して煩惱の事をいつたのではない。今他力といふ大なる力によりて、自

力といふ心を破りてしまつた以上は、佛智忽ちに凡夫の心に入る樣になるのである。自然凡心が佛心と同じくなるのである。

以上によりて凡夫の心も佛心と同じやうになると申すのである。

次に機法一體を釋する必要がある。以前にも述べた樣に、機法一體といふ事については、御文章にも四個章出てゐる。祖師聖人は敢て文字上に於て左程述べ書きせられなかつたが、義については度々申されてをる。四箇所といふのは

『しかれば南無の二字は、衆生の阿彌陀佛を信ずる機なり。次に阿彌彌佛といふ四の字のいはれは、彌陀如來の衆生をたすけたまへる法なり。此のゆへに機法一體の南無阿彌陀佛といへるは此の心なり。之によりて、衆生の三業と彌陀の三業と、一體になる所をさして、善導和尚は、彼此三業不相捨離と釋したまへるも、此の心なり。

此の故に南無と歸命する機と、阿彌陀佛のたすけまします法とが、一體な

る所をさして、機法一體の南無阿彌陀佛とは申すなり。

されば彌陀をたのむ機を、阿彌陀佛のたすけたまふ法なるが故に、之を機法一體の南無阿彌陀佛といへるは此の心なり。

此の故に南無の二字は、衆生の彌陀をたのむ機のかたより、また阿彌陀佛の四字はたのむ、衆生をたすけ給ふ方の法なるが故に、之すなはち機法一體の南無阿彌陀佛とまふす心なり。』

とある。此等の四文は、皆安心決定抄の文意より出來たものである。「安心決定抄」には

『眞身觀には、念佛衆生の三業と、彌陀如來の三業と、相離れずと釋せり佛の正覺を、衆生の往生より成し衆生の往生は、佛の正覺より成ずるゆへに衆生の三業と、佛の三業と全く一體なり。佛の正覺のほかに、衆生の往生もなく、願も行もみな佛體より成じたまへりと、知り聞くを、念佛の衆

生といひ、此の信心の言ばに、あらはるゝを、南無阿彌陀佛といふ、かるが故に、念佛の行者になりぬれば、いかに佛を、はなれんと思ふとも、微塵のへだてもなき事なり。佛のかたまり、機法一體の南無阿彌陀佛の正覺を、成じたまへける故に、何とはかばかしからぬ、下々品の失念のくらゐの稱名も、往生するは、稱ふる時、はじめて往生するにはあらず。極惡の機のために、もとより成じたまへる往生を、となへあらはすなり。また大經の、三寶滅盡の衆生の、三寶の名字をだにも、はかばかしく、きかぬ程の機が、一念となへて往生するも、となふる時、はじめて往生の成ずるにあらず。佛體より成ぜし、願行の薫修が、一聲稱佛のところにあらはれて往生の一大事を成ずるなり。かく心得れば、われらは、今日今時往生すとも、我が心のかしこくて、念佛をも申し、他力をも信ずる心の功にあらず勇猛專精にはげみたまひし、佛の功德、十劫正覺の刹那に、われらにおい

て成し給ひたりけるが、あらはれもてゆくなり。覺體の功徳は同時に十方衆生の上に成ぜしかども、昨日あらはす人もあり。今日あらはす人もあり已今當の三世の往生は、不同なれども、弘願正因のあらはれもてゆくゆへに、佛の願行のほかには、別に機に、信心ひとつも、行ひとつも、くはふる事なきなり。念佛といふは、此の理を念じ、行といふはこのうれしさを禮拜恭敬するゆへに、佛の正覺と、衆生の行とが、一體にしてはなれぬなり、親しといふもなほ愚かなり。近しといふも猶遠し、一體のうちにおいて能念所念を、體のうちに論ずるなりと知るべし。」

というて、六字の法體を釋し給ふのである。六字法體のうちに於て、能念所念を分ちて、此被の三業となすのである。能念所念一體に成し給へる、名字の法體なるが故に、一體の中に、且て能念所念を分ちて、法體の元から、一體なる事を示すのである。是は即ち法體成就の釋を以て、六字法體をあらはすのである。然れども、我等衆生に於ては、信心決定の上にいふ事である、といはれる說を忘れてはならない。

若したゞ法體成就のみを知つて、機の了解を知らなかつたならば、唯法一體ばかりであつて、機がのけてゐる。若し又唯心已心を執すれば、唯機一體ばかりであつて、法がない。又たゞ、能歸の三業ばかりを知つて、法體の成就を知らなかつたならば、機法別體であつて、機法一體ではない。機法一體の法を深くよく味ふ可き必要があるのである。吾人は唯法一體のみでは無く、唯機一體のみでは無く、機法別體では無く、實に機、法、一、體、の理を我が身の上に體現して南無阿彌陀佛の六字の名號を唱へる事を忘れてはならない、是れ實に我が親鸞聖人の教理に於ける六字名號論の根底を爲す處のものである。次には章を改めて他力回向の眞相を說くことゝしやう。

第九章　他力廻向論

第一節　至心廻向

淨土眞宗の教は阿彌陀如來の第十八願念佛にある事は教相判釋によつて知られたのである。之を釋尊が說いて吾人に被らしむるので、此の能被の教義と所被の機とが相合して往生の業因を辨ずる事とあらはすのが、此の他力廻向である、他力とは幾度も述べた通りに彌陀如來の絕對無限の因か果力であつて廻向とは其の力を施し與へて下されるといふ事である。そこで凡夫が何れからも法力を與へられる事なく往生の業因を得るといふならば、それは他作自受、或は無因他因をいふ事になつて往生をうるといふ事はあろう筈はない。造惡不善の凡夫が往生するといふには何か大なる力を與へてもらはねば、成佛は出來ないのである。それで他力廻向といふ事が必要になつてくる。此處に彌陀は第十七

願に大慈大悲を以て廻向といふ事を約束せられたので、十方無量の諸佛に我名を稱揚して貰ふて、それで凡夫に自分の御持ちになる功德を施こさうといはれたのである。であるからして、凡夫は自力の力はないけれども、釋尊の御說法によりて、彌陀如來の功德を聞き成佛するの因とするのである。之が他力廻向である。他力は、彌陀の誓願力と正覺力とである。廻向といふ事は、種々なる意味がある安樂集には、實際回向、菩提回向、衆生回向の如く三に縮めてある。一體全體廻向といふ事は、是れは死者の爲に經文を讀み、眞言陀羅尼を唱へ其の功德を廻らして、彼の死者に向はしむる事で、四教集解には、廻向とは自分自分の功德を廻らして他の衆生に向ひ、同じく無上の佛菩提に會す聲を廻らして角に入るれば響き必ず遠く聞ゆるが如しと述べてある。此の中角に入るとは角は吹き物で、其他意味は聲は遠く聞えるものではない。而るに角に入るれば響きなつて遠く到るが如しといふので、其の理由は、一心は法界を

體としでゐる。故に廻向心一念發すれば三世に通し、十方に亘る。此の故に此の方の心と彼の方の心と同一法界なるを以て礙へずして、上は佛界より。下は餓鬼、地獄界に至る迄功德通じて廻るものであるといふ意味である。今述べる所の廻向はそれと全く異なる意味である。即ち今の廻向は廻轉趣向の義であつて、彌陀の手許に於て、五劫思惟永劫修行の結果で、眞實の智慧と慈悲とを成就したまへたのを、却つて廻轉して、吾人凡夫に趣向せしめ給ふので。言葉をかへて、いへは、施與の義である。吾等凡夫は愚痴とか忿怒とか貪欲といふ煩惱ばかりが心中に滿ち〳〵てゐて、菩提に對しての眞實も暑慧も慈悲もないのである。又自利利他の二行共に存せないので、却つて、利已の情欲の爲に已を顧りみないといふ有樣なのである。それであるから彌陀如來が長い間御苦勞なされて、そして、獲られた功德を我等造惡不善の凡夫に廻向しましますのである。是が淨土眞宗の他力廻向である。願成就文には至心廻向といふ語がある

少し至心廻向について述べやう。

至心回向の四字は文の儘にて解するならば、信心歡喜乃至一念の思ひより、勤むる所の一切の善根を、至誠眞實の實より念々毎に極樂に回向して、かの國に生れんと願ひよとのたまふ經文である。かように伺へば、至心回向といふは自分自身の心から勤むる所の行をふりむける心である。然るを我開山親鸞聖人は、其の名號を聞いて、信心歡喜する乃至一念は、彌陀如來の眞實心より回向し給ふて顯はし給ふのである。只信心歡喜の一念ばかりが、至心の回向ではない。下の願生彼國の思ひも至心回向より顯はる、即ち即得往生住不退轉も、至心の回向より與へ給ふ利益であるとせられたのである。覺如上人の願々抄に『至心回向の四字は承上起下と習ふ所なり』承上といふは上の信心歡喜を引起すことで、法藏比丘の因中の至心より生ずるのである。起下といふは下の住不退轉の先途と達することである。又至心回向し給へる如來大悲の無緣の慈悲か

ら出來るものであるといはれたのである。然れば、第十八の願成就の文にて至心とあれば、本願の文の至心の成就にてあるべきに、願文の至心は如來より行者に與へ給ふ眞實である。今此の至心は如來の眞實心であつて、如來の眞實より信心歡喜の一念の回向し給ふぞと示されたのである。であるからして淨土眞宗を開き眞實の教行信證を以てあらゆる法門を他力にて顯はし給ふたのである。其の源は即ち回向の二字にあるので、往相、還相の二種の回向も凡夫の自力からするのではなく、他力より回向し給ふぞと顯はし給ふたのである。『眞實信心の稱名は乃至自力の稱念さらはるゝ』との給へは、凡そ一切佛法八家九宗の所談修する所の法を、衆生に回向し、佛果に回向して菩提を求むるのである、淨土門にては十九二十の願の機類は、皆、已が勤める功德稱名念佛も悉く皆回向の善となすのである。然るに第十八願の他力眞實の法門は、一切の功德皆悉く佛樣の方から回向し給ふぞと仰せらるゝのである。これ今諸

衆生、功德成就が兆載永劫の法藏比丘の大悲の行なれば、あらゆる善根はみな衆生に與へ給はんが爲である。今眞實慈悲の親であるところの彌陀如來の惡人女人の淨土に安く向へとの給ふは、兆載永劫の修する所の不可思議功德を、南無阿彌陀佛に之を納めて與へ給ふより外はない。よつて、今迄、たとひ、少しの善根や、有漏の善根があるとても、佛果に向へは乞食同樣であつて、只乞食のまとうてゐる破れ衣を見るが樣であるければ、之を虛假雜毒と名づけて、佛果の因とはならない。であるからして、之を捨てゝ佛の方に成就せられた所の名號を我子に與へ給ふのである。よつて佛の子であるところのあらゆる十方諸有の衆生が其の名號を聞いて、信心歡喜するは、凡夫の起すに似てはゐるけれども、至心に回向し給へりと仰せられれば、皆如來の眞實心から與へ給ふ願力の回向である。我が眞宗にてつねにいふところの願力回向、他力の回向といふ回向は、其のもとは、此の成就の文の至信回向である。此の至信回向の大信心

といふ事を知らないからして、信ずる心は凡夫の心であるけれども、他力を信するのであるからして、他力の信と名づける樣に思ひ、又起す信は凡夫の心なれどもこれが即ち如來の他力の回向なりと已が佛を賴むところのたのみ心をつのりながら、之を如來の回向なりと思ふて惑ふものがある。然るに宿善到來して實に疑の晴れた身はかかる往生一定の心が我が力にて有る筈はない。全く佛知他力の御授けなればこそ、此の凡夫の往生に疑ひが晴れたのであると思ひかく知られる所が至心回向の御實の屆かせられたる所の思ひは爰の道理理窟をかんがへて學解の沙汰に心得ては、至信回向の味ひを知られないのである。これによつて、證文には、『至信心業といふは至信は眞實といふ理なり。眞實は阿彌陀如來の御心なり。回向は本願の名號を以て十方衆生に與へたまふ御法なり』との給ふ。實に此の願成就の文前後を貫ぬいて、他力の至極を顯はし給ふ肝要の字なり心得よ。之によつて此の至心回向已下を欲生心成就との給ふ時に、此の樣

に諸師の釋に異なる妙釋が他宗にもその例があるかといふに、かの「法華經」の方便品に現はれたる諸法實相十如是の文は、經文にては何の譯も分からない、又天親菩薩の「法華論」でも其の相は更に見へないけれども、天臺大師の「止觀開悟」の已が心中より照らさせらるゝ所で、僅かな文に十界十如三千の妙法を開き給ふたのである。爰を「天臺には智者大師の開悟し給ふ所、幸に修多羅と合する」と讃歎し給ふ所で、餘宗よりは、兎や角の義論はなすべからざる所である。

今も至心回向の四字を以て前後を貫ひて、本願力の回向を顯はし給ひ、行者歸命の一心より即得往生の利益までみな、他力の回向なりと顯はし給ふ事實を彌陀如來の直說と仰ぎ奉るより外はないのである。以上は至心回向の四字の意義である。偖て次に曇鸞大師は此の回向について往相回向と還相回向との二門を建立しておかれたのである。往相とは彌陀如來の方へ進みゆくの回向であ

るし、還相とは一度、彌陀如來の御傍へ到りしものが再び還り來るの回向である。更に往還の二相について、節を改めて說くことゝしやう。

第二節　往還の二相

吾人が至心の回向に就いて、七高僧の一人たる支那の曇鸞大師は往相回向と還相回向との二門を建てゝ置かれたが、本節に於ては此の二種の回向に就いて說くことゝする、抑も往相回向と還相回向との二種を開かれたる所以は、往相とは、彌陀如來の御座る、極樂淨土に往生する相狀に就いての回向であつて、即ち吾等凡夫が往生の因も果も、悉く彌陀の廻向施與に係かると云ふ事である。然れば吾人が成佛する道は念佛無碍の一道とて、此の念佛より外にないのである。其の念佛は彌陀の因意の萬行、果地の萬德を具足してゐるのである。夫れ故に吾人は之を護て速に安樂の淨土に生れ、無上の佛果を證ることが出來るのである。之れ全く吾人が自分の力によりて企て及ぶ所ではない。全く彌陀

如來の願力廻向なれば、之を往相回向といふのである。次に

還相廻向といふのは、穢國に還來して、他人を救濟する相狀といふことで、吾人は安心定得の處で、既に彌陀如來の無限の大慈大悲を全領し、自分の有限の宗教的意識は無限絕對と融合してあるけれど、未だ形體の上に有限の羈絆を脫せぬからして、今世にあつては、幾分は慈悲者の光明を漏せども、佛の樣に慈善の大用を全く顯はすことは出來ない。夫れが此の有限の身體を捨てゝ後に、一び安養國に佛果を成就したならば、實に其の佛果の大勢用として、忽に穢國に還り來て、或は八相作佛し、或は感應神通、妙に有限界に向ふて罪惡者を救濟する事が出來る。此の大勢力までも、彌陀は吾等に施與し給ふと云ふのが還相廻向の意である。偖て此の二種廻向を曇鸞大師は、淨土論注に、一びは往生を願ふ行者の自利利他として釋を爲し、亦一びは彌陀の自利利他の行として釋して、大に他力廻向の眞意義を發揮せられたのである。之を證明するに四

十八願の中で、十八、十一、二十三の三願を擧げ、叮嚀に凡夫往生の道を開かれたのである。我が宗祖は全く曇鸞大師の意を承けて我淨土眞宗を御開きになつたものである、御本書である「教行信證」の一番初めに、

『謹んで淨土眞宗を按ずるに、二種の廻向あり、一には往相、二には還相なり、往相の廻向について眞實の教行信證あり。』

とある。尙此の名目は、「御文章」に、

『そのたのむ心といふは、即ち是阿彌陀如來の、衆生を、八萬四萬四千の大光明のなかに攝取して、往還二種の廻向を、衆生にあたへまします心なり。』

又曰く、

『南無阿彌陀佛の廻向の恩德廣大不思議にて、往相廻向の利益には、還相廻向に廻入せりといへるは、この心なり。』

阿彌陀如來の凡夫の爲に、御身勞ありて、此の廻向を、我等に與へんが爲に、廻向成就し給ひて、一念南無と歸命する所に於て、此の廻向を、我等凡夫にあたへましますなり、故に凡夫の方よりなさぬ廻向なるが故にこれをもて、如來の回向をば、行者のかたより不回向とは申すなり』

などとある。さて前述の如く他加とは因から云へば、彌陀の本願加で、總じては四十八願皆他力である、併し且く願々の特用に就いていへば、往相回向は吾人が往生する源因と結果であるから、開けば三願となる、還相回向は涅槃の勢力で、吾人が成佛した上に、更に利他大悲を專ら行ふものである。即ち本願に配當したならば次の樣である。

至心回向
- 往相回向
  - 行——十七願／因
  - 信——十八願＼因
  - 證——十一願／果
- 還相回向　二十二願＼果

しかるに、此の往相回向と還相回向を開き說くのに、其の例は少くないのである。

第一　淨土眞宗に付いて開く、敎卷の初『謹んで淨土眞宗を按ずるに、二種の回向あり。一はに往相二には、還相なり。

第二　本願力に付いて開く。文類聚の大行の下に『しかるに、本願力の回向に二種の相あり、一つには往相、二つには還相なり。』

第三　名號に付く、和讃に、『南無阿彌陀佛の回向の、恩德廣大不思議にて、往相向回の利益には、還相回向に回入せり。』

第四　彌陀に付く。和讃に、『彌陀の回向成就して、往相還相ふたつなり。』

第五　欲生心に對し、此は觀經に、『三者回向發願心とあり。是を行卷には、此の心をば大悲回向心とは名づけたり。』而して此の欲生心の下に、論註の往還二回向の文を引用したまふのである。

第六　亦是發願回向之義に付く。

此の樣に吾等造惡不善の輩が往因、證果を得るのは、全く阿彌陀如來の願力他力から、吾等衆生に御渡たし下されるのであつて、吾等の力で出來たものとては一つもない。然らば、吾等は之を全領して、往生成佛が出來るのである。果してさやうであるならば、之を全領する機會はいつであるかといふに、彌陀如來は此の往相回向、還相回向を一つの僅かしかない南無阿彌陀佛といふ六字しかない果號に、成就具足し給ふに依つて、吾等は若し宿因多幸であつて、此の經說に、あひ奉り名號六字の義理を會得したならば、此の時彌陀の自利利他功德を全く授かり、宗敎生活には貧窮下賤な者といはれてあつたものが、忽ちに此の彌陀大悲の回施によつて、大福長者となり、無上寶珠の名號の主人となつた次第である。唯徒づらに口に稱名念佛をばかりしてゐたところで、決して、夫れが眞正な念佛行者といはれたものではない。徒らに口稱のみせずに

内心に深く他力の信心をいただいて、大慈大悲の御意の中に日暮をさせて頂くのが、眞宗他力回向の教義を受けた人といふのである。

第十章　安心起業論

第一節　信心の意義

安心といふは如何なる事かといふに、即ち南無阿彌陀佛といふ如來の勅命に順うて安心する事である。如來の勅命とは、「汝一心正念にして直ちに來れ、我よく汝を守らん、」と稱せられた呼聲の事である。そこで今「御文章」によりて信心の事を少しく明せば次の樣である。

『抑も、當流勸化のおもむきをくはしく知りて、極樂に往生せんと、思はん人は、まづ、他力の信心といふは事を存知すべきなり。それ他力の信心といふは、なにの要ぞといへば、かゝるあさましき我等如きの凡夫の身が、たやすく淨土へまゐるべき用意なり。其の他力の信心のすがたといふは、いかなる事ぞといへば、何のやうもなく、たゞ一すぢに阿彌陀如來を一心

一向にたのみたてまつりて、たすけたまへと思ふ心の一念おこるとき、必ず、彌陀如來の攝取の光明をはなちて、其の身の、娑婆にあらん程は、此の光明のなかに、おさめまします なり。これすなはち、われらが往生のさだまりたるすがたなり。されは南無阿彌陀佛と申す體は、われらが他力の信心をえたるすがたなり。此の信心といふは、此の南無阿彌陀佛のいはれを、あらはすすがたなりと、心得べきなり。されは、われらが、いまの他力の信心ひとつによりて、極樂にやすく往生すべき事さらに何のうたがひなし。

そも〳〵當流の他力信心のおもむきと申すは、あながちに、我身のつみの深きにも、心をかけず、たゞ阿彌陀如來を一心一向にたのみたてまつりてかゝる十惡五逆の罪人も、五障三從の女人までも、皆助け給へる不思義の誓願力ぞと、ふかく信じて、さらに一念も疑ふ心なければ、かたじけなく

も、その心を、如來のよくしろめしてすでに行者のわろき心を、如來のよき御心とおなじものにしたまふなり。彌陀如來の他力本願といふは、今の世に於て、かゝる時の衆生を、むねとたすけすくはんが爲に、五劫が間にこれを思惟し、永劫があひたこれを修行して、造惡不善の衆生を、ほとけになさずは、我は正覺をとらじと。誓文をたてまして、其の願すでに成就して、阿彌陀となせ給へるほとけなり。末代今のときの衆生にをいては、此のほとけの本願にすがりて彌陀を深くたのみたてまつらずんは、成佛するといふ事あるべからざるなり。

抑も、阿彌陀佛の他力の本願をはなにとやうに信じ、またなにとやうに機をもちてか、たすかる可ぞなれは、それ、彌陀を信じたてまつるといふは、なにのやうもなく他力の信心といふいはれを、よく知りたらん人は、たとへは十人は十人ながら、みなもつて極樂に往生すべし。さて其の他力の信心と

いふは、いかやうなる事ぞといへは、たゞ南無阿彌陀佛なり。此南無阿彌陀佛の六つの字の心を、くはしく知りたるが、すなはち他力信心のすがたなり。されは南無阿彌陀佛といふ六字の體をよく〳〵心得べし。當流の安心のすがたは、いかんぞなれば、まづ我身は、十惡五逆、五障三從のいたづらものなりと、深く思ひつめて其の上に思ふべきやうは、かゝるあさましき機を、本とたすけ給へる彌陀如來の不思議の本願力なりとふかく信じ奉りてすこしも疑心なけれは、必ず彌陀は攝取し給ふべし。此の心こそ、即はち他力眞實の信心をえたるすがたとはいふべきなり。かくの如きの信心を一念とらんずる事は、さらになにのやうもえらず。あら心えやすの他力の信心、あら行じやすの名號や、しかれは此の信心をとるといふも別の事にはあらず。南無阿彌陀佛の六の字を、心得わけたるが、すなはち他力信心の體なり。

夫れ、彌陀如來の念佛往生の本願と申すは、いかやうなる事ぞといふに、在家無智のものも、又十惡五逆のやからにいたるまでも、なにのやうもなく、他力の信心をとるといふは、いかやうなるひつかしき事ぞといふに、なにのわづらひもなく、たゞひとすぢに、阿彌陀如來を、二心なくたのみたてまつりて、餘へ心を散らさざらん人は、たとへは十人あらば十人ながら皆佛になるべし。此の心一つを保たんはやすき事なり。只聲に出して、念佛ばかりをとなふる人は、おほやうなり。それは、極樂には往生せず。此の念佛のいはれを、よく知りたる人こそ、ほとけになるなれ。なにのやうもなく、彌陀をよく信ずる心だにも、一に定まれば、やすく淨土へは參るべきなり。此の外には、わづらはしき秘事といひて佛をも拜まぬものは、いたづらものなりと思ふべし。これによりて、阿彌陀如來の他力本願と申すは、すでに末代いまのときの罪ふかき機を、本としてすくひたまふが故に

在家止往のわれら如きのためには、相應したる他力本願なり。あらありがたの彌陀如來の誓願や、あらありがたの釋迦如來の金言やあふぐべし。信ずべし。しかればいふ所の如く、心得たらん人々は、これまことに、當流の信心を決定したる念佛行者のすがたなるべし。』

などとある。以上の如く、色々と「御文章」によつて味はつて見ると、我等造惡の凡夫が極樂淨土に往生する事の出來るのは、全く阿彌陀如來の御本願を信ずるばかりである。其の信ずるといふも決して私の力ではない、全く〳〵佛の手厚き御慈悲の御力である。即ち他力の廻向の大信心がある事を忘れてはならぬ。それで六字の名號は阿彌陀如來樣が御自分の御手下で御成就なされた次第で、其の名號を信ずるのが即ち自分の力であると思ふたならばそれは大變な間違である。それでは其の樣な心違ひをした人は半自力半他力の人と申さねばならない。即ち其の樣な人は自分の價値を充分に知らない人であると共に、佛の

眞實の敎を仰がぬ人であると申さねはならぬ。吾等自身の僞りのない赤裸々の狀態を考へて見ると、名號のいはれを信ずるといふ事は愚か、口に稱名さへも出る事の六つかしい極惡最下の者である。しかも吾等の心は二六時中變りづめ動きづめであつて、一刹那も靜穩な事がないのである。しかも惡い方面へのみ動くので日一日と惡くなるばかりである。その樣な淺ましい此の吾等の口から、南無阿彌陀佛などといふ、善根の具足した言葉が出る筈はないのである。稱へる事が出來なかつたのである。此の樣な我等の口から、今は南無阿彌陀佛の六字の名號が稱へらるゝ事が出來、佛智を疑ひ勝ちな吾等の心は、今はどう疑がはうとても、疑ふ事の出來ない金剛の信心の華の咲く事の出來たのは全く不可思議なる權威を持つて御出になる阿彌陀如來の賜物である事はいふまでもない事である、即ち阿彌陀如來は、五劫が間思案し、永劫が間御修行御苦勞して下されたのは、全く十方諸有の衆生吾等凡夫を救はんが爲に、四十八の大願

を一つ一つづゝ成就せられて正覺となり給はれた事を、うたがひなく信じさせて頂いた以上は、只一心一向に賴むばかりと、先づ心得ねばならない、彌陀の回向にこたへて、信樂の心が起れば、やがて、欲生の心が、發得して、次第に轉入すればこそ、三信とも、三心ともいはれ、遂には一心一念にも落居するのである。

さて他力安心の決定の事について、經論によりて辨ずれば、大無量壽經の第十八願の文には『至心、信樂、欲生我國』の三信心を誓はせられ、觀經には『至誠心、深心、廻向發願心』と說かせられ、阿彌陀經には『名號を執持して一心にして亂れず』とある。是は皆信心をあらはす言葉である。その信心といふは再三再四述べた樣に、疑のないのを以て、信とするのである。いはゆる佛語に隨順して、之をうたがはず、只師敎を守りて、之に違はないのである。尙又此の信心なる一心は前述の如く三心と同じである。

「安心決定鈔」に、次の如く云うてある。

『名體不二の正覺をと稱へます故に、佛體も名におもむき、名に體の功德を具足する故に、なにと、はかばかしく知らねども、平信のひとも、稱ふれば往生するなり。されども下根の凡夫なる故に、そゝろに、ひら信じも、適ふ可らず、其の理を聞き開く時、信心は起るなり。念佛を申すとも往生せぬをば、名義に相應せさる故にとこそ、曇鸞も釋し給ひ、名義に相應すといふは、阿彌陀佛の功德力にて、吾等は往生すべしと思ふて、稱ふるなり。頑解の信心を言葉にあらはす故に、南無阿彌陀佛の六字を、よく心得るを、三心といふなり。かるが故に、佛の功德、ひしとわが身になしたりと思ふて、口に南無阿彌陀佛と稱ふが三心具足の念佛にてあるなり。』

とあるが尙又、聖人と弟子との問答がある、それは聖人が常と同じく、某村にて御說法遊ばした時に、信心を獲た者、まだ未信の者とが法義を聽聞してゐた

時に、其の中の一人が、聖人に對して、問ふには、『至誠等の觀經にある三心を具し候ふべきやう、いかゞ思ひ定めはんべる可き』と、問ふたので、聖人が答へていはれるには『三心を具する事は、只別の樣はない、阿彌陀佛の本願に、わが名號を稱念すれば、必ず引接するぞよと御仰せになつたければ、早速と信心を決定して、攝取せられ奉つるべしと、深く信じて、心に念じ、口に稱するに物うがらずして、既に往生をうちかためた、思をなして、歡喜の印には、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と稱へたならば、自然に三心具足のいはれがあるのである。三心とは、只本願をうたがはない一心をいふのである、煩はしく、三つの心を外に求むる必要はない。又在家無智の輩はさほどまで、思はないけれども、念佛申すものは、極樂に生れるなればとて、いつも念佛さへ申せば、三心は具足するのである。さればこそ、言ふに甲斐もない者どもの中にも、神妙の往生はするのである。只本願をたのみて南無阿彌陀佛と怠らず稱ふべきなり』

といはれたので、その人も非常に喜んでゐたとの事てある。

「唯信鈔」には

『つぎに念佛を申さんには、三心を具すべし。只名號を稱ふる事は、誰か一念十念の功をそなえざる、しかはあれども往生する者は極めて稀なり。是即ち三心を具せざるによつてなり。觀無量壽經にいはく、三心を具する者は、必ず彼の國に生るといへり。善導の釋に曰く、此の三心を具する者は必ず往生を得るなり。若一心を少くせば、即ち生るゝを得ずといへり。乃至、三心といふは、ひとつには至誠心是即ち眞實の心なり。乃至、阿彌陀佛の昔、菩薩の行をたて、淨土をうけ給ひしも、偏に實の心を起し給ひき是れによりて彼の國に生れんと思はんも、又實の心を起すべし。乃至、此の心を惡しく心得たる人は萬づの事ありの儘ならずば、虛假になりなんずとて、身に取りて憚るべし、恥がましき事をも人にあらはし知らせて、却

つて、放逸無慚のとがを招かんとす。今眞實心と言ふは淨土を求め、穢土を厭ひ、佛つ願を信ずる事眞實の心にてあるべしとなり。必ずしも、恥をあらはにし、とがを示せとにはあらず。事により折に從ひて深く酖酌すべし。善導の釋にいはく、不得外現賢善精進之相、內懷虛假といへり。二つには深心とは信心なり、先づ信心の相を知るべし、信心とは深く人の言葉を賴みて疑はざるなり。乃至、後に百千人のいはん事をは用ひず、元きゝし事を深く賴む、是を信心といふなり。今釋尊の所說を信じ、彌陀の誓願を信じて二心なき事、又かくの如くなるべし。今此の信心につきて二つあり。一つには、我身は罪惡生死の凡夫曠劫より此の方、常に沈み常に流轉して出離の緣ある事なしと信ず。二つには決定して、深く阿彌陀佛の四十八願衆生を攝取し給ふ事を、疑はざれば、彼の願力に乘りて定めて往生する事を得と信ずるなり。乃至、佛いかばかりの力ましますと知りてか、

罪惡の身なれば救はれがたしと思ふ可き、五逆の罪人すら、尙十念の功ゆへに刹那の間に、往生をとゞ、況んや罪五逆に至らず。功十念に過ぎたらんをや、罪深くば、愈々極樂を願ふ可し、不簡破戒罪根深といへり。善少くば、ます〳〵彌陀を念ずべし。三念五念佛來迎との給へり。空しく身を卑下して、心を怯弱にして、佛智不思議を疑ふ事勿れ。乃至、只信心の手をのべて、誓願の網を取るべし。佛力無窮なり。罪障深重の身を重しとせず。佛智無邊なり。散亂放逸の者をも捨つる事なし。只信心を要とす。其の外をは省みざるなり。信心決定しぬれば三心自ら備はる。本願信ずる事實なれば、虛假の心なし。淨土をまつ事疑なければ、回心の思あり。此の故に三心異なるに似たれども、みな信心に具はれるなり。三つには廻向發願心といふは、名の中に、其の義聞えたり。詳しく之をのぶべからず。過現三業の善根を廻らして極樂に生れんと願ふなり。』

とあるが、如何にも能く親鸞聖人の信心の意義を表はして居るやうに思ふ、然るに此の信心には三つの意味が含まれて居るので、茲に三信の説明と、三心の説明とを述べるの必要がある、乃ち節を改めて説くことゝしやう。

第二節　三信と三心

後世物語を見ると某が「念佛するとも、三心を知らんでは往生する事が出來ないといふのは如何なる理のためであるか」と問ふた所が、師のいはれるには、『實際左樣である。但し故法然上人の仰せ事あつたのは、三心を知つてゐても、念佛をせずは其の甲斐がない。たとひ、三心を知らなくても、念佛さへ申せば更に三心は具足して極樂には生れると仰せられたのを、まさしく承たまはつた事を此頃心得合はすれば、實に左樣だと覺へたのである。但し各々思ふて御出になる事を御言へなさい。(中略)妄念ととゞめて、口に名號をとなへて、內外相應するを虛假を離れた至誠心の念佛であると早合點するものは、此の至誠佛

を知らぬものである、凡夫の眞實であつて、行ずる念佛は、偏に自力であつて彌陀の本願に違反した心である。既に自分自身から其の心を淸淨にするといふのならば、聖道門の心である。淨土門の心ではない、正しく難行道の心であつて、易行道の心ではない、之を心得べき樣は今の凡夫自から煩惱を斷ずる事が六つかしいから、妄念も自然止めにくいのである(そうであるのるを、彌陀佛は之を考へ遊ばして、かねてかゝる衆生の爲に他力の本願を立てゝ名號の不思議にし衆生の罪を除かうと誓はれた次第である。さればこそ他力とも名づけたのである。此の理を心得たなれば、我が心でものうるさく、妄念妄想と止めやうともたしなまぬ。(中畧)只佛の名願を念ずれは、貪瞋痴の煩惱具足の凡夫であるけれども、必ず往生すると信したれはこそ心安らかになるのである。されはこそ易行道とは名づけるのである。(畧)我身の罪によつて、往生を疑ふは、佛の本願を輕んずるである。是が即ち信心のかけた心である。之をいへば、前

の至誠心を未だ心得ないからである。(畧) 深心には二つの意味がある。一つには深く自身は現に是れ罪惡生死の凡夫であつて煩惱具足し善根薄少であつて常に三界に流轉して、曠劫から此の方出離の緣がないと信ぜしとすゝめて、次に彌陀の誓願の深重なるを以て、かゝる衆生を導き給ふと、信じ知りて一念も疑ふ心勿れとすゝめ給ふのである。此の心を得たならは、自分の心の惡きにつけても、彌陀の大悲の說こそ、實に尊いと仰ぐべきである。元より我が力で參ちはこそ、我が心のわるからんによつて、疑ふ思を起すだらう。然し佛の御力で濟はれるのであると思へば何の疑もないのである。是が深心である。(畧) 善の心で申す念佛は、萬が一である。其の餘は皆けがれた念佛である。されは切に願ふといふも此の念佛がものになるとも思はれない。人々も又その樣な心を直さすは適すまいと申す時に、尤もだと思ふて迷ふのはどうであらうかと問はれた時に、師いはく、是は先の深心をまだ心得ない、尙廻向發願心のかけてゐ

るといはねはならない、善導の御心によると、釋尊の敎に從ひ、彌陀の願力をたのみたならば、愛欲瞋恚が起り交はるといふけれとも、更にかへり見るなよ、と仰せられてある。實に本願の白道豈に愛欲の樣な小沈にけがされるだらうかけがされないのである。他力の功德はむしろ、瞋恚の炎に燒けようか、燒けない。假令欲信が起り腹が立つても沈めがたい忍びがたいのは、只、佛助け給へと思へは必す彌陀の大慈悲にて助け給ふ事は、本願力であるからして攝取決定である。攝取決定であるからして、往生は決定であると思ひ定めて、誰がさまたげ樣ともかまはぬが金剛心である。是を發願回向心といふのである。(畧) 一心一向なる是れ自誠心の大意である。我が身の分をはからうて自力をすてゝ、他力につく心の、只一筋なるを眞實心といふのである。他力を賴まぬ人を、虛假の心といふのである。次に他力を、賴みたる心の深くなつて疑のないのを深心の大意とするのである。いはゆる彌陀の本願はすべて元から罪惡深重の凡夫のため

であると心得たならは、自分の惡しきにつけてもさらに疑ふ思の無いのを深心といふのである。次に本願他力の眞實なるに入りぬる身であるけれは往生決定なりといふのである。思ひ定めて願ひたる心を回向發願心といふのである。(畧)餘行を捨てゝ念佛をするのは、阿彌陀佛をたのむ心の一筋なるゆへである。是が至誠心である。名號を唱ふは疑のないからである。是が深心である。名號を唱ふるに往生を願ふ心の起るからである。是は回向發願心である。是等程の心得は、如何なるものも念佛して極樂に往生しようと思ふ程の人は、具してゐたるが故に、無智の者も、念佛さへすれは、三心具足して往生するのである。只詮する所は、我身は元から、煩惱の絶間なく起こる身分であるけれは、始めて心の惡いとも善いとも沙汰してはならぬ一心一向に彌陀如來をたのみたてまつつて疑はず、往生決定と願ふて申す念佛は、即ち三心具足の行者とするのである。知らねども、稱ひれば自然に具せらるゝと故法然上人の仰せ下れたのは、

此の理があつたがためである。(畧)一度心をゐた後には、只南無阿彌陀佛ととなへるばかりである。三心すなはち、稱名の聲にあらはれた後は、三心の義を心の底に求める必要はないのである。

偖て一心三心は說ひたが三信について述べる必要がある。吾等は絶對界の佛より見ると、本來、眞實の心もなけれは、智慧、慈悲心とてもないから、阿彌陀如來は、殊に、第十八願を建て、永劫に修行して眞實と慈悲と智慧を成就せられ、之を吾等に與へようといはれるのである。吾等が之を聞いて、疑の無い一念に、眞實智慧慈悲の三心を領受するのである。即ち至心とは彌陀の眞實心であつて、前述の至誠心である。彌陀の眞實至誠の心を以て成就した名號を聞いて、吾等は眞實心を得るのである。信樂とは彌陀の智慧心であつて、而して疑惑無明の一點も雜らぬを云ふのである。彌陀が永劫に成就し給ふた廣大の淨信心を吾等に賜はつて、初めて自力の及ばない事を知り、他力の不思議を深く

信じて疑はぬのである。之が前述の深心である。欲生我國とは彌陀の慈悲で一切の衆生は大悲廻向の心がないから、彌陀は、諸有の衆生を見捨てぬといふ大悲廻向の心を成就し給ふ。此の大悲が吾等の腦裏に徹到するから、安養國である、彌阿の淨土に參らうといふ願心が起るのである。是れ前述の廻向發願心である。

以上三經の文異なるも裏面から見れば、只第十八願の眞實にして、共に他力安心を說いたものである。

然れども、彌陀の誓願では三心別相を顯はしてあるが、吾等が之を貰ひ受けるのは聞いて信ずる一念にあるのである。即ち阿彌陀經に一心と說き、天親菩薩の一心歸命といはれるのは、此の意味である。之を本願三心機受一信樂といふのである。

本願(法)(至心 眞實 慈悲 欲生我國 信樂)信樂 機受(衆生

然れは本宗に談ずる所の安心は三信即ち一の信樂であつて、選擇本願に順ひ奉り、餘行餘善を捨てゝ、自力修業なんどといふ惡き心を離れ、他力を賴み二心なく、只一心に佛の勅命に歸すのるのが、如實修行相應の信心である。是が極樂淨土に往生する眞實の正因である。苦し吾等が宿善開發したならば、名號の義をきいて疑ひなく無二の信心を發得し、即座に佛因を成滿するのである。それについて、一度得た信心は相續させねばならない。信心相續といふは、別の事ではない、始め發起する所の、安心を相續せられて一念の心の通るを、憶念の心常にとも、佛恩報謝ともなるのである。御一代聞書に、

彌陀を賴むところにて、往生決定と信じて、二心なく、臨終まで通り候はゞ往生すべきなり。

道德はいくつになるぞ、道德念佛申さるべし。自力の念佛といふは、念佛多く申して、佛に參らせ、此の申したる功德にて。佛のたすけ給はんずる

様に思ふて稱ふるなり。他力といふは、彌陀を賴む一念の起る時、やがて御助けにあづかるなり。其の後念佛申すは御助けありたるありがたさ〳〵と思ふ心を喜びて、南無阿彌陀佛〳〵と申すばかりなり。されば他力とは他の力といふ心なり。この一念、臨終まで通りて往生するなり。とおほせ候ふなり。

とある。吾等はよく〳〵此の安心相續といふ事にも氣をとめて見ねばならぬ。必要があるのである。

尙又信行一體について述べんに、

決定鈔に、

下品下生の失念の稱念に願行具足する事は、更に機の願行にあらずと知るべし。法藏菩薩の五劫兆載の、願行の凡夫の願行を成する故なり。

とある。尙此の一代記の言葉をかりていへば、念佛三昧に於て、信心の決定せ

られた人は身體も南無阿彌陀佛と思はねばならぬ。自然身體の中にあつて身體を支配する精神も南無阿彌陀佛と思はねばならぬ。吾等が色心二法、三業四威儀すべて報佛の功德のいたらん所がないければ、南無の機と阿彌陀佛の片時といへども、吾等の身を離れる事がないければ、念々みな南無阿彌陀佛である。さうであるからして、息の出る時息の入る時も佛の功德が離れられる事がないからして皆南無阿彌陀佛の體である。佛のかたから、機法一體の南無阿彌陀佛の正覺を成し給ふたのであるからして、なにとはかばかしからぬ、下々品の失念の位の稱名も、往生するのは、稱へる時、始めて往生するのではない。極惡の機の爲に元から成し給へる往生を稱へ表はすのである。また大經にある所の三寶滅盡の衆生が、三寶の名字さへも、はかばかしく、きかぬ程の機が一念稱へて往生するも稱ふる時始めて往生を成ずるのではない。佛體から成せられた願行の薰修が、一聲稱佛の所へあらはれて、往生の一大事を成ずるのである。

かように心得たならば、吾等は今日今時往生するとも、我が心の賢くあつて、念佛をも申し、信ずる心の功によるのでもない。全く、勇猛專精に勵み給はれた所の佛の功德十劫正覺の刹那に、我等に於て成し給ひたのが、あらはれた次第である。覺體の功德は同時に十方衆生のうへに成したけれども、昨日あらはす人もあり。又今日あらはす人もある。現過來の三世の往生は不同はあれども、弘願正因のあらはれもつてゆく故に、佛の願行の外には、別に機に、信心一つも、行一つも加ふる事がないのである。攝取の光明たるや廣大無邊であつて、吾等を照して身から髓に逓るのである。心は三毒五欲の煩惱で滿ちてゐる此の心までも、佛の功德のいたらぬ所はない。機法もとより、一體である所を南無阿彌陀佛といふのである。此の信心起つた上は、口業にはたとひ時々念佛するとも、常念佛の衆生なのである。三緣の中に口につねに身につねにと釋するは、此の心である。佛の三業の功德を信ずるからして、衆生の三業が如來

の佛智と一體になつて、佛の長い間修せられた功德が、衆生の身に意にあらはるゝ所である。佛の功德が元より衆生の所に、機法一體に成せる故に、歸命の心のおこるといふも、始めて婦するのではない。機法一體に成せし功德が衆生の意業にうがひ出るのである。南無阿彌陀佛と稱へるのも、稱へて佛の身體に近づくのではない。機法一體の正覺の功德が衆生の口業にあらはるゝのである。三世衆生の歸命の念も正覺の一念にかへり、十方諸有の稱念の心も、正覺の一念にかへるのである。更に機に於て、一稱一念も止まる事がないのである。領解も機には止まらない。領解すれば、佛願の體にかへる。名號も機には止まらない。稱へればやがて弘願に歸るのである。であるからして心に信ずるも一念に歸り、口に稱へるも正覺の一念に歸る。たとひ千聲稱ふとも正覺の一念をは、出づる事は出來ないのである。信ずれば佛體に歸り稱すれば佛體にかへるのである。念佛三昧の領解が開けたならば、身も心も、南無阿彌陀佛になりかへり

て、其の領解が言葉に顯はるゝ時、南無阿彌陀佛と申すのがうるはしい弘願の念佛である。佛の正覺の外に衆生の往生もない。願も行も皆佛體から成し給ふたのであると知り聞のを念佛の衆生といひ、此の信心の言葉にあらはるゝを南無阿彌陀佛といふのである。

以上に依つて信行一體の事が大分解せられた事と思ふ。吾等は如何かにして彌陀の慈悲の中に暮させて頂き、今世も、安樂、來世は淨土に參らさせて頂くといふ即ち、二世安樂を全ふさせて頂く身とならねばならないのである。

第十一章　現當利益論

第一節　利益の意義

淨土眞宗の信心は、平生の時にありて、宿善開發の時機さへ調熟したならば南無阿彌陀佛といふ名號の義理を會得し、直ちに往生の業が辨じ出來るのである。夫れであるから、更に行因といふて修行をなして其の修行を因として、成佛するといふ効果を求むるのではないのである。既に利益を得畢りたのである併し凡夫といふ有限界の果報を餘して居るから、此の果報の身體を捨て離れて方に無限の果體即ち、佛樣の境遇に住するのである。斯の樣な理由があるからして、自然と現在の世即ち現世と未來の世即ち當來世との三種となるのである それで現在の世に得る利益をば正定聚と名づけ、當來世に得る利益を必至滅度のいふのである。此の二益を得るのが彌陀選擇の本願に相應したところの他力

信心行人であるといふのである。

此の二益は、願文を云へば、第十一願に顯はれてゐる。然るに願文では安養國に於て、此の二益を得るが樣に見えるのであつて、淨土門他流と、眞宗とは大に其の見方が違つてゐるのである。他流では正定聚も滅度も共に當來安樂國に生じて得べき益となすが、親鸞聖人は、經文の大體及び、龍樹菩薩、曇鸞大師等の御指南に基いて正定聚を現世の利益と見るので、此の正定聚は、通佛教の所談から云ふたならば、初歡喜地以上の名前であつて、一分佛果を證つた位で、もはや此の位に入れば自然と功用を勞せないで佛陀の位置に這入るのである。即ち菩薩の中で一番上席にある位のものだと云はねばならない。それで安養國卽ち極樂淨土にありては、自內證を尋ねれば新往生の人も舊住の人も皆佛果涅槃を極めぬ者はない。往生さへすれば忽ち皆佛樣である、必至滅度の御利益とは此の事であるが、併し彌陀は、安養界の主人公であつて、往生人

は御客樣であり、且つ又阿彌陀佛は師匠であり、說法主である。往生人は弟子であり參詣者であるといふ事を顯はす點からは、阿彌陀佛は無上の佛樣であり往生人は勝れた所の正定聚の菩薩であり。邪定聚や不定聚の下位にある菩薩は此の彌陀佛の說法なされる席上に居ないといふて正定聚が當來世の利益となるのである。此の事は我眞宗の開山親鸞聖人も許して認めては御出になるが、然しそれは佛會莊嚴の一往の義であつて、再往究竟の極談は現世の利益である。吾等凡夫が阿彌陀佛の信仰を得たならば、今生は身體こそ父母所生の肉身ではあるが然し急に心が正定聚の位に住して居るといふのが、親鸞聖人の御教である。此れは前來述ぶる所からして出てくるところの必然の結果である。既に安心定得が吾等衆生の有限の所爲でない。無限果體の阿彌陀樣の吾等造惡不善凡夫が可愛いと御思召になる慈悲の心から御渡し下された業因で、此の業因は絕對究竟の佛種である。其れ故更に吾等の如き愚昧なしかも劣つてゐる心から

企て起す所の行業をは、敢て要せないのである。既に佛種を一念に成就せしからは、何時此の不淨な身體を捨ても、佛果は超證せられる。して見ると、佛種成就から佛果に到達する間を、正定聚と云はねば、何といふべきか。他宗では正定聚を或は初住不退となし、又は初地不退と解釋なしてゐる、眞宗では此の正定聚を現世の利益となずが故に、實は初住とも初地とも名づく可きでないが、是は所謂寄顯門で、次生に佛果となると決定した故、阿耨菩提は退轉せぬ再び生地に流轉せぬといふ意か、初地不退とも、等覺不退とも云ふべしと、通佛敎の位階に寄せて、勝れた事を顯はすのである。そこで正定聚といへは不退轉と同じ意義で、正しく成佛の確定せる聚類となりて決して菩提を退轉せぬ。且つ生死に再び迷はないといふ意である。之を願成就の文には即得往生住不退轉といひ、龍樹菩薩は父母所生の此の肉身を以て即時に必定に入ると申されてゐる源空法然上人は『平生の時既に往生と業を成ず』と申され、我開山親鸞聖人は

『眞實信心の行人は、攝取不捨の故に、正定聚に住す、正定聚に住するが故に、必ず滅度に至る』

と仰せられてゐる。又觀經の會座では、五障垢穢、韋提希夫人が即坐に無生法忍を得たと說き、阿彌陀經には、『彌陀國に生れんと欲する者は、阿耨菩提を退轉せぬ』と說いてある。又念佛の行者は、信心開發の時佛は攝取の光明を放ちて、其の光の中に包み給ひ、必ず捨て給はないといふ御慈悲のあることは、觀無量壽經の『光明偏く十方世界を照らして、念佛の衆生を攝取して捨て給はず』の文句によりて充分に解しゐられるのである。

今や我等は幻の樣な世界とばかり思ふて居た此の世界は幻ではない、汚惡滿ちた厭はしい處とばかり思つてゐた人生は、今や全く汚れた惡の集まつた世界ではない。元より人生の敢果なき運命をながめたなら、昔も今は變りなく幻にはすぎぬ。人世の實體を掴んで見たならば、依然として汚と惡との集り過ぎ

ないのである。然し一度、彌陀の本願を信じ、念佛を稱ふる身として頂き、佛の御救濟によりて此の愛妻愛子の垢穢身ながら、現在初地初住の菩薩に等しく、等覺補處の彌勒と同じく、更に進んで云へば、如來と等しき位置卽ち正定聚の分人となされ、加ふるに攝取の光明を以て照護したまふ事であれば、念佛の行者の身上となつて此の人生を省みれは、その汚れや惱みのうへに、尊く清らかな佛の光明がましますのを知覺し、變化極まりなき、幻ろしの樣な其の運命の中に、末通りたる佛の眞實信心が動いて居る事を、認めずにはをられない。

「華嚴經」には『一つの塵の中にも十方の諸佛が在しまして御說法遊ばされてゐる』と書いてある。塵は捨つ可きものである、然るに其の捨つべき塵の中にさへも、諸佛が在しますと聞けは、仲々以ておろそかにする事が出來ないものである。今も其れと同じ樣に厭ひ離なれねばならぬ此の人生に一度佛樣の光明と、佛樣の眞實信心の表現である南無阿彌陀佛とがあつて、我を攝取し、我

を呼び給ふと聞けば、放逸や懈怠の心で日暮をする事は出來ない。されば吾等は目には見えないが、朝に夕に常に佛と共に卽ち彌陀と共に起臥してゐるのであるといふ心持になり、卽ち朝に佛と共に起き、夕に佛と共に臥すといふ心を以て日暮すべきである。

第二節　現世の利益

我が開山親鸞聖人は信心を獲得するものゝ功德に付いていはれるには、

『金剛の眞心を獲得する者は、横に五趣八難の道を超えて必ず現生に十種の益を得るなり。』

と、是を『正信偈』に依つて、更に伺ふて見ると、

『信を獲て見て敬ふて大に慶喜すれば、卽ち横に五惡趣を超絕す』云々

とある。それで今此の兩文に依つて少しく解釋を施こして見ると、護信見敬大慶喜の御文は大經下卷に、

『法を聞いて能く忘れず、見て敬ひ得て大に慶ぶ。即ち我善き親友なり』とある。即ち此の經文を短縮せられて、正信偈にかくあらはして吾等を御教化遊ばされたものと思はれる。

『獲信』とは經の偈では『法を聞いて能く忘れず』とある一句を、護信といふ二字に御縮め遊ばされたものである。青年時代とか、壯年時代は相應に腦は良しいから、記憶も達者であるが、老年になるに從つて、青年時代よりは、ズット、記憶も衰ひ根氣もなくなり、身體も思ふが儘に動かぬ樣になつて、只今手に持つたものさへ忘れるといふ始末になるのである。御教を聞いてゐる間は少しなりとも、解せられるけれども、其の場を立つと忘れて仕舞ふのが吾々凡夫の持性である。論の中にこれを膝惠の補特伽羅と名け給ひて、飯くふ時膝の上に椀を置いたやうなもので、何か急用があつて座を立つと汁も飯もみな覆してしまふのである。今の如く御教も聞いてゐる中はともかくも、座を立つと皆忘

れる。然るに、

『法を聞いで能く忘れず』

と仰せられる御經文は、此の方の心には充分に會得する事が出來ないことを御知りになりて。親鸞聖人は是を吾等に解し易く御解き下されたのである。即ち「法を聞いて能く忘れず」とは、耳だもちのよい事をいふのではない。文々句々の理を皆忘れてもよいが然し、

『如來二種の回向を深く信ずる人は皆、等正覺にいたるゆへ、憶念の心は絶えぬなり』

と。斯くの樣な取り所のない者を。淨土へ參らさせて下さるゝ事のありがたやと思ふ一念は、降つても、照つても變る事なく、歷緣對境、嬉しい事、悲しい事、苦しい事、樂な事、向ふ境界は色々代れども、何なりとも、手がかりにして、御助け下される御恩を思ひ出して忘れぬ樣になし下されたのを、御經には

『法を聞いて能く忘れず』と說かせられ、祖師親鸞聖人は『忘れぬとは只信心決定の事なり』と御示しなされたのである。

そこで此の信を獲得した者は即ち横に五惡趣と八難を超絕して十種の利益を得る事になるのである。そも〳〵五惡趣八難とは何か且つ超絕するとは如何なる事であるかといふ事をいはねばならない。それに就て、まづ此の文は何經から出て來た言葉であるかといふに『大無量壽經』卷下に、次の樣な言葉がある。

『必ず超絕去る事を得て、安養國に往生せよ、横に五惡趣を截り、惡趣自然に閉ぢん。』

とある。横とは朱子が孟子の註に『横とは理に順ぜざるなり』と書いてある。即ち算盤の桁を外れ、道理の前に違ふた事を横と云ふ。されば今我等が身は、どこへ出しても、ゆくさきは三惡道、臨終の時は牛頭、馬頭、阿防羅刹の異類異形の獄卒に取りまかれ、火の車の迎を受けて、熱や悲しや怖しやと、狂ひ死

に死んで仕舞ふて、多百千劫永々の責苦を受ねばならぬ。地獄は一定の住家ぞかしと、値うちの定りつた身が、此段宿善開發して、如來の御慈悲に縋るばかりで、無漏淸淨の眞實報土に往生して、彌陀同體の果報を得るとは、道理だけでは了解できない。一代佛敎の算盤の表をはづれ、善惡因果の廢立、理窟だではさらりと片づけて置いて、箇樣の惡人に未來極樂參りを安堵させて下さるゝと云ふは、外に例のない事である。

超とは、三大阿僧祇の長い年月かゝりて修行する事を、僅かに南無の一念に飛び越えさせて下さる事をいふのである。

五惡趣とは、地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間界、天上界、これで六趣になれども、其の中修羅は通力威德のある方からは天にをさめ、鬪諍の苦みのある方からは地獄に攝める。夫れであるから開いた時は六趣なれども、合せた時は五惡趣で、此の內に修羅道はこもつてをる。人間界や天上界は果報が勝

れたに由つて、惡趣とはいはれないと云ふ論もあらうが、極樂淨土の悟りから眺むれば、人間天上共は惡趣となるのである。全體が夢幻泡影、夢の如く、幻の如く、水の上の泡の如く、鏡にうつる影の如く、人間一生須臾の間は、怖い事にもあひ、悲しい目にもあひ、樣々に心を痛め身を苦しめて、遂に醉生夢死といはんか、一生をづら〳〵と立てしまふのである、　古歌

『世の中は何にたとへしあさぼらけ、漕ぎゆく舟のあとの白波』　これは善い事も、惡い事もすみてしまへば皆一床の夢と消ゆく、賴み少ない世間の有樣は仲々善趣とはいはれないのである。此の吾々人間も地獄、餓鬼、畜生と同じ迷の仲間なれば、五惡趣の中にあるといはねばならぬ。

八難とは、難といふ文字は、時間なしといふ意味であつて、佛のありがたい道を聞く暇の無い事である。

第一は地獄道で、地獄に墮在してゐる人は常を苦を受け通しにしてゐるから、

いかにありがたい佛敎も聞く事が出來ないのである。是に付いて大いに吾等が氣を付けねばならぬ事がある。夫れは吾等は八萬四千の煩惱を具足してゐる人間だからといふて、自暴自棄になつて、常に心に瞋恚、愚痴、貪慾の各煩惱が强く起つたならば、人の喜んで聞く法義も一寸とありがたくないだらう。又善く聞きとる事が出來ない。和讃には之を、

たとひ大千世界に、みてらん火をもすぎゆきて、佛の御名を聞く人は、なかく不退にかなふなり。

とあつて、三千大千世界も一呑みにせようと思ふ樣な我々の心の中が、逆境とて、心に適はぬ事に出會すると、直樣火の手があがつて、心一杯が火の野原となる。それを忍辱の德を以つて、耐へ忍ぶのが卽ち觸光柔輭の御利益と申すのである。一人にても立腹してゐるものがあれば、其の人は一向にありがたい事はないので、緩つくり落ちついて聽く暇か無いであらう。是が第一の難であ

る。何もそんなに佛法を聽く暇がないと言つても、我々は人間であると威張つた處が、心の内に腹立ちの煩惱が盛になつてゐるところは、我心に地獄を作つて苦しんでゐると同樣である。

第二は餓鬼道、此の餓鬼道には有財無財の區別があるといふ事であるから、これは貧慾の煩惱の强いのである。暫時が間此の本を讀んでゐる際でも、心内に計算づくめた事をしてゐたならば如何だらう、諸煩惱が起りて貪慾本を爲すとあつて、凡て煩惱の起るのは貪慾を本とする所の。慾から起つて人を疑ふようにもなり立腹もする樣になるのである。慾といふものが八萬四千の煩惱の一番の本であると誡めてある、然しながら人間といふものは慾なしには生存してゐる事は出來ないが、慾もよい加減にしておかないと、佛法を聞いても一向ありがたくも、尊くもないのである。

第三畜生道、畜生は動物ではあるが人間の後に位する即ち吾等人類に使はれ

てゐる獸類の事である。人間とは餘程智識才幹の點に於て違ふのである。象の樣な大きいものでも、獅子、虎、熊の樣な猛獸でも皆人間に使はれてゐる。それで此の吾ら人間が智識が足らないと畜生道に落ちて仕舞ふのである。是は餘程考へものである。私は愚痴なものであると固まつて仕舞へば何事もわからない。何時までたつても、聞きわけられないであらう。であるけれども愚痴なればこそ佛の深大な智慧を貰つて佛になるのである。如何なる事を言つてもわからりませんといふのなら、一層の事、演說も說敎も聞かぬがましであると思ふ。我々が正直正當に話を聞きに來た上に人が聞いて分かるのが、我が聞いて分らぬ筈がないと氣張つて見れば『如何に不信なりとも聽聞を心に入れて申さば、御慈悲にて候間信を得べきなり。唯佛法は聽聞に極まる事なり。』とあつて、佛法は只聽聞にあり、佛の念力が增上緣となつて下さるのである。今學校の先生が生徒にこれだけ敎へてやらうといふのでも一時間敎へてやつたからして後は知

らぬといふのではない。二年も三年もかゝつて教へてやらうと云ふ事だから先生である。丁度先生が一時間に生徒に對して、是だけ教へてやれると見込まれる時は、之を習つたものが一時間確かり勉强したならば、必ずそれだけ學べるに違ひない。我々に聞かせるのは佛の念力と知れて知れば、第三の難も遁れられる次第である。

第四は長壽天、天上界の事で人間界より長命を保つによつて名づけられたものである。長生をするものであるから、常に油斷勝で佛教を開くといふ有がたい心になれぬのである。人間も長生するに定つてゐたならば、矢張り何んでも聞き落しするに違ひない。而るに老少不常であるから一日でも生き長らへてゐる中に確かりと聞いて置かねばならない。そうせないと後にはとりかへしのつかない苦るしみにあはねばならないのである。

第五は北洲とて北俱盧洲の事で千年位は生きてゐられるところである。

第六は佛前佛後、釋尊の出生の前後に生れて釋尊の教へを受けない樣なもの程あはれなものはない。吾等は釋尊の人滅後三千年の後に生れたのであるが、各高祖がたの御力によりて御教を受ける事の出來るのは實に喜ばねばならぬ。であるから此の時に於て確かりと聞いて置かねば一生涯の損になるのである。

第七は世智辯聰とて、智慧あり學問あり、しかも雄辯なれば、一寸聞きにゆく事が出來ない。即ち非常に忙はしい故說教演說を聞きに行く暇がない人もあらう。今は其の暇を缺いてをるから宜いのである。

第八に諸根不具というて、身體に故障のある人である。以上卽ち八難である。それで眞實の信心を獲得するものは、横ざまに五惡趣八難の道を超え必ず現世に十種の利益を得るのである。現世の利益の十種は實に我が親鸞の教理に基いて信心を發した者の獨り壇まにするを得る處である、然らば其の十種とは何であらうか、吾人は更に節を改めて十種の利益に就いて詳說せねばならない。

第三節　十種の利益

親鸞聖人が此の現在の利益には十種あるとなされたのである。此の十種の利益は如何にして生ずるかといへば、田を作る人は米が先づ目的であるので、米を得れば藁がついてゐる事は當然の話である。即ち眞宗の教義を聞く人は阿彌陀佛の大慈大悲の大題力によりて、第一番目に未來の往き先を知らさせて頂く事が出來て未來といふものに對して大安心といふ境遇になり、更に信心といふ米を頂く、さうすると、その米につき添ふ藁ともいふべき十稱の利益が、此の世に生存してゐる間に、別に自分から努力せずとも、自然に十種の利益を得る事が出來るのである。第一に、

（冥衆護持の利益）

これは善導大師の觀念法門の中に委しく說いてある。一と口に申すと、念佛を稱へる者は、東方の毗留勒叉、西方の毗留博叉、北方の毘

沙門の四天大王併に龍神八部等に守護せられるによつて、惡鬼神が近づく事が出來ないといふ御利益である。自分が目を閉ぢて眞暗だと言ふつても矢張世の中は白晝である。さういふ樣な具合に考へて見ると冥衆護持といふ事が分る。冥といふのは暗いと言ふ事で一寸聞くと燈明の樣であるが否さうでない。字が全く反對である事が解せられる。即ち冥衆とは暗い所の衆である。それで冥衆といふのは、我等凡夫の肉眼を以て見る事が出來ないから暗き處に在る衆といふので、向ふからは明かである。夫から護持の益とはまもりたもちたまふといふ事で、大切な物を手に持つたが如くに護つて下さるといふ事で、何う云ふお方々が暗い處から護つて居るかと云ふに、此の眼でこそ見えぬが、佛心が佛から受取られた初一念から一々賴まなくても、晝よりもまだ明かに、我々の心の底を見透ふしに御護りになるのである。

淨土和讃を聞いて見れば其の中に現世利益に關する和讃が十五首ある。之を

讀んで見ると、冥衆護持の利益が明白に解かれるのである。南無阿彌陀佛を稱ふればといふ和讃が澤山あるが、其の南無阿彌陀佛を口に稱へるに就ては能く心に受け取つて稱へねばならぬ。人が稱へるから已も稱へるといふのは丸で口眞似である。『あゝからといふはあとなり唐辛子』とある句の如く、唐辛子を咬みしめたればこそ心の底から、アー辛や辛やと獨り出に出て來る己を忘れて出てくるものである。卽ち人が聞いて居るとか聞いて居らぬとかに拘はらないのである。『獨り居にものをいはせる暑かな』今も確と戴けて居ると己れ忘れてこぼれて出る。其の稱へ心が大切である。和讃を讀んで御覽なさる人はよく知つてゐるに相違なからうけれども、知らざる人の爲に一言書かう。

南無阿彌陀佛をとなふれば、此の世の利益きはもなし流轉輪廻の罪消えて、
定業中夭のぞこりぬ。

是は一言に書き盡せば、是迄に私が死んだかも知れないのに、幸に生存し得る

事が出來、念佛を稱へて此の世の中に日送をしてゐる事を喜ぶのである。併しこれをこれから向ふへかけては妙な事になる却て命を縮めるやうな事になるとも知れぬ。卽ち世間には此和讃の意味を取り違へて衞生も何も要せぬ念佛さへ唱へたならば、何に構ふものかと、喰つたり飲んだり、やれ〳〵といふ事になつてしまつて、念佛を利用したのではなく、反對に惡用して、さうしてどうも自分の樣に思ふ樣にならないと、南無阿彌陀佛は一向に價値がない利益がないと思ふ樣になるのである。冥衆の護持があるとすれば愼しみ戒めねばならないのである。次の和讃に曰く、

南無阿彌陀佛を唱ふれば梵王帝釋歸敬す。
諸天善神ことごとく夜晝常に守るなり。

卽ち諸天善神が皆總出になつて夜晝通して念佛の行者を守護し下されるのである。一々人間の眼には見えない。それといふのも人間の眼は人間の思ふてゐ

る程に明かなものでない。その證據は猫や鼠は夜でも忘分に目が見えるにかゝはらず、萬物の靈長だと威張つてゐる人間は暗夜に於ては、燈の力を借らずば一寸先は明白に見る事は出來ない。即ち猫や鼠よりも劣つた眼を以てゐるからである。それであるから眼には見えないのである。然し眼には見えずとも梵王帝釋は念佛の權威に服從して念佛行者を飽くまで敬ふのである。古歌に『心だに誠の道にかなへなば祈らずとても神や守らん』といふのがある。是は北野の天神の歌だと申す事であるが、まことの道を踏み行へば、神は正直の頭に宿ると言つて居る如く、自分の心が眞つ直ぐであつたならば、始終神佛が御護り下さるので、いくら神佛に祈禱した處が、自分の心が曲つて居つたならばそれは無理な勘定である。南無阿彌陀佛を唱ふといふのは、自分の心の疑ひ晴れて唱へるのである。さうして見ればもはやいつまで經つても變らぬ佛の誠の心が其の儘に顯はれるのだから梵王も帝釋も夜晝なしに常にお護り下さるのである。

勿論吾々が一々賴み廻はつてからでない。

南無阿彌陀佛を唱ふれば四天大王諸共に、夜晝常に護りつゝ萬の惡鬼を近づけず。

是は四天大王が夜晝なしにお守護下されて、諸々の惡鬼を近づけて下されないのである。

南無阿彌陀佛をとなふれば堅牢番祇は尊敬す、影と形との如くにて夜晝常に守るなり。

即ち大地の神々方は念佛の行者を御守り下されるのである。

南無阿彌陀佛を唱ふれば難陀跋難大龍等、無量の龍神尊敬し夜晝常に護るなり。

無量の龍神といふのは、海の中に居る數知れぬ所の海の神の事である。今日迄吾人は念佛を稱へさせて頂いたありがたい身であつたからして船旅をしても難

船にも逢はずに命を全ふして居るのだが、もと今日以後念佛を稱へさせて頂く樣な事がなかつたら、これからはひつくりかへつて沈むかも知りませぬ。

南無阿彌陀佛ととなふれば閻魔法王尊敬す、

五道の冥官みなともに夜晝常に護るなり。

彼の恐る可き厭う可き地獄にゐる閻魔樣は一人でも極樂へ往く事の出來るありがたい彌陀の本願を信ずる人のあるのを喜んでゐるのである。故に却つて其の護りを受けることになるのである。又、

南無阿彌陀佛をとなふれば他化天の大魔王、

釋迦牟尼佛のみまへにて守らんとこそ誓しか。

他化天といふは欲界の第六であるから、即ち第六天の魔王が釋尊の見舞にて念佛行者を守るのである。

天神地祇は悉く善魔神と名づけたり、

是等の善福皆共に念佛の人を護るなり。

是は善神の守護である。其の次は惡神の怖れである。

願力不思議の信心は、大菩提心なりければ、

天地にみてる惡鬼神皆悉くおそるなり。

次に又、

南無阿彌陀佛をとなふれば觀音勢至は諸共に、

恒沙塵數の菩薩と影の如くに身に添へり。

此の通り夜晝無しに大勢がゝりで守つてお出でになる。これだけのお方々が皆離れずに守るといふのに誰も見て居らぬ聞えて居らぬといつて、我儘勝手な事をやつてはならない。皆心の底を見透して守つてゐられるのである。これが冥衆護持の利益といふのである。

（至德具足の利益）

第二は至德具足の利益であつて、大無量壽經 卷上に、書かれてある。開山親鸞聖人は七十六歳にならせられて、御製作になつた淨土和讃に、

阿彌陀佛の御名をきゝ、歡喜讃仰せしむれば、
功德の寶を具足して一念大利無上なり。

とある。併し和讃は七文字五文字なるによつて解し難い人があるだらうといふありがたき御慈悲からねんごろに蓮如聖人は、

彌陀を賴めば南無阿彌陀佛の主になるなり南無阿彌陀佛の主になるといふは信心を得る事なり。

と心易く敎へ給ふたのである。借主ではいかぬ、借主ならば持主に返濟せねばならぬ。彌陀を賴めば南無阿彌陀佛の主となるとは持主になるのだといふ事を御說明なされたのである御文には、

一念に彌陀をたのみ奉る行者には、無上大利の功德を與へ給ふ心を、和讃に

聖人のいはく、『五濁惡世の有情の選擇本願信ずれば、不可稱不可說不可思議の功德は行者の身にみてり。』

とある。それで彌陀を賴む一念の起る時には、南無阿彌陀佛の主になつて心は正定聚不退轉の位に住するのである。それで身體は凡夫であるが、心は淨土に住み遊ぶともある。卽ち、『超世の悲願聞きしより、吾等は生死の凡夫かは、有漏の穢身は變らねど、心は淨土に住みあそぶ』といふ和讃があるによつて、伺はれる。

(轉惡成善の利益)

第三番目は轉惡成善の利益といつて、是は觀無量壽經の中に書かれてゐる一口にいへば惡を轉じて善に化せしめるといふ事である。經文には『若念佛者當知此人是人中分陀利華』とあつて之を訓讀せば、

『若し念佛する者は、當に知るべし此の人は是れ人中の分陀利華なり。』

となる。分陀利は蓮花の事である。衆生貪瞋煩惱中、能生清淨願生心、貪瞋煩惱の濁り水の凡夫の心の中へ蓮の如き清淨無垢ないやみのない佛の心を貫ふのであるから、今迄の惡男子、惡女人がうつてかはつて、善男子善女人と呼び立てられるやうになり以前の不清淨な心身からその心身を損じた所の心の垢が落ちるのである。そして世人からは彼の人は大變奇麗な垢ぬけのした人だと賞められる樣になるだらう。愚斯光者三垢消滅とあつて、佛の光明に照らされると三通りの垢が、全く落ちるのである。和讃に、

道光明朗超絶せり、清淨光佛と申すなり、
一度光明かふる者、業垢を除き解脫を得。

以上に述べた事が轉惡成善の利益といふべきものであると思はれる。

（諸佛護念の利益）

第四番目は諸佛護念の利益といふので、是は阿彌陀經に、此の諸々の男子

善女人、皆一切諸佛の爲めに共に護念せらるとある。一切諸佛が皆な一つになつて、念佛行者を護りづめ思ひづめにして下さるといふのである。それ程諸佛が思ひ詰めにして下されるなるば、南無阿彌陀佛を十度稱へる其の中には、一度位は諸佛の御名前も稱へて御禮を申さなければ濟まないかといへば、それには及ばない。これは外の御宗旨とは違つて彌陀一佛を本尊として安心する宗旨なれば『何の不足ありてか餘行餘善に心を止む可きや』で御開山聖人が僅か一首の和讃を以て其の譯を聞かさせて下されてある。

『諸佛の護念證誠は、非願成就のゆへなれば、金剛心をえん人は彌陀の大恩報すべし』

諸佛が念佛行者を護念して、其の往生間違ひないと證誠として證據人となつて下さるのは、私等が諸佛を賴んだからでない。悲願成就のゆへなればである。悲願とは慈悲の本願である。悲願成就と仰せられるのは第十七の御本願の事であ

る。御本書といつてゐる教行眞證は第壹卷から第六卷迄ある。第二卷行の卷の初めの所に、

『斯の行は大慈大悲の願より出でたり、即ちこれを諸佛稱揚の願と名づく』

と仰せられてある。諸佛の稱揚讃歎の說敎を聽聞して其の御恩の御力に依つて信心を得る事ではあるが、金剛心を得ん人は、彌陀の大恩報すべし。諸佛の證誠護念があつたればこそ、此の凡夫の心が、今は疑晴れて金剛の信心が得られたなら、諸佛の御恩は大したものであるから、諸佛へ御恩を報せねばなるまいかと言ふに、只彌陀佛の御恩を報すべしとあるのである。

これは阿字十方三世佛とありて南無阿彌陀佛の阿の一字に十方三世の諸佛がこもるとあれば、諸佛と彌陀との間に守護すると云ふ約束までが出來てある。あれも聞いたり、これも見たりするやうではどちらへもつかぬ。學問として宗敎學として佛法の比較をするのは宜いが、隨分世界の宗敎を分類して見ると數

多くある。其の宗敎の區別を知るのは學問としては必要であるけれども、安心の方は自分の御緣の深い宗旨を以て極めて置かねばなりませぬ。名所見物するのでも今夜の宿を極めて見物をせないと云ふと、日が暮れてからうろたへ廻はるのは實に見苦しい事で當を得た事ではない。諸佛護念の益といふて、諸佛方が打揃ふて念佛行者を守つて下さる其事が知れたならば、阿彌陀如來の第十七の本願成就したればこそと喜ばねばならぬ。

（諸佛稱讃の利益）

第五には諸佛稱讃の利益即ち諸佛が念佛行者が御譽め下さるのである。惡口をいはれて宜い事は無からう。譽められる時は、たとひ御世辭をやると思つても腹が立つまい。處が人間はなかなか譽められるものではない。然るに御開山聖人は正信偈に、

『一切善惡の凡夫人、如來の弘誓願を聞信すれば、佛は廣大勝解の者との給ひ

此の人を分陀利華と名づく』

と仰せられて、大變な御言葉である。誓願不思議を信じたものは、廣大勝解者とてものの解つた者だと佛は仰せられ、又此人を分陀利華と名づけ給ふ。是は前にも申した通り其の心が蓮の如く奇麗になつたと言ふのである。まだ其の外に正像末和讃にも出てゐる。

『他力の信心うるひとを、歡ひ大きに喜べは即ち我が親友ぞと敎主世尊は譽め給ふ』

と仰せになつてゐる。親友とあれば、丁度同じ町の小さい時から仲善い人或は同じ志を懷いて學問をし且つ心から互に打ち解けて話の出來る如く、信心の德によつて佛祖を敬ひ歡喜慶喜のよろこびで日暮しする人ならば、皆親友だと言つて、敎主世尊即ち釋迦如來は賞めて下さるのである。御文一帖目第一通には、

『されども同行なるべきものなり、これによりて聖人は御同朋御同行とこそかしづきておほせられけり』

心の同じ友である。心と心とが手を引いて彌陀の淨土に近寄らせてもらう所の道づれであると仰せられてある。此現生十種の利益を委しくいへば、二つや三つでも中々澤山な話はあるが、我々が心の中へこれを戴く時は一念同時である

そこで御文章に、

一念に彌陀をたのみ奉る行者には無上大利の功德を與へたまふ心を和讃に聖人のいはく、五濁惡世の有情の選擇本願信ずれば、不可稱不可說不可思議の功德は身にみてり。

と仰せられて功德と云ふものは人が奪ふ事の出來ぬ價値のあるもので、人が卽ち取つて行く事が出來ぬ、其人の性質に具はる所の價を言ふのである。念佛行者は何時の間にか、此れ程の價値をつけて頂くのである。どうぞ一日でも半日

でも生き長へて居る限りは是等の功德を戴いて自分自分の本分を盡くし度い事である。心だけにても愉快活潑に勇み勵んで即ち勇猛精進して、報恩の念佛を稱へなければならないのである。詰らない事をなしたり、云ふたりする暇があるならばその時間に念佛を稱ふれば、何時の間にやら此の價値をつけて戴く事が出來るのであるから其の所に心をつけねばならない。それで何事をするにも先づ自分の心に引き當てゝ見て其の人は其の人らしうせねば、その人の人格の價値といふものは零となるのである。それで親は子に向つて親らしう、子は親に向つて子らしう、女は男に向つて女らしうせねばならぬ。此のらしうと云ふ事が守れたならば德となつてしまふ。總て何事をするのでも我身我身へ引當てゝ見ねばならない。此の心で命ある間は夜晝人の道を守るのは、全く彌陀大悲の御陰であると、何處までも如來の御慈悲を戴いて、稱名諸共に日を送れば、第五の諸佛稱讃の利益を受ける境界に至るのである。

（心光常護の利益）

第六番目は心光常護の利益といふので、觀無量壽經に左の如くある。

『光明遍ねく十方世界を照し、念佛の衆生を攝取して捨て給はず』

と仰せられてあるのである。心光常護とは心の光を以て常に護るといふ事で佛の御身體では無い。佛の御心の光明である。南無阿彌陀佛の六字に疑晴れた一念に、凡夫の心を佛の心の中へ入れて仕舞ふ。佛の心と凡夫の心とが一體になつたのである。佛の方へかけて云へば、攝取の光明の中に攝め取られるのである。さうして我々が此の世の中に生きて五十年百年と仕事を致して居る我々の方へかけていつたならば佛心凡心一體である。高僧和讃に左の如くある。

無疑光の利益より、威德廣大の信をえて、必ず煩惱の氷解け、即ち菩提の水となる。

とある。又其の次には、

罪障功德の體となる。氷と水の如くにして氷多きに水多し。さはり多きに德多し。

とあるが様に光明の縁と信心の因とで、煩惱の氷が解けてしまへば即ち菩提の水となる。信心決定の上からは、佛の御心の光明で常に照らし護つて下さるから、丁度何も知ずに、子供が安心してすやすやと寢て居つても怪我もせぬのは親の看護の御力であると同じ事である。實に子を持つて始めて親の恩を知る。どうも子供といふものは、世話なものであるが、私の親たるものが、どれ程面倒を見て育てゝ下されたのかといふ事が解かる。其の親の恩といふ事が解せられない間に、親を泣かせる様になつてしまふ。今此の心光常護の利益で、佛の心をしつかり聞き分けて見たならば、佛の心は全く親心の如くである。否親より以上の慈みの深いのである。慈民衆生、猶如一子と、誰一人も繼子扱ひをな

されぬによつて、たとひ子は親を忘れて居ても、親は子を思ひづめにして下さると云ふのが心光常護の利益といふのである。

（心多歡喜の利益）

その次の第七番目が心多歡喜の利益である。即ち心に歡喜多しとあつて今迄に較べて見ると信心の德で、喜の多いといふ事である。歎異鈔第九章に、

『念佛申し候らへども踊躍歡喜の心おろそかに候事』

『いそぎ淨土へ參りたき心の候はぬは、いかにと候ふべき事にて候ふやらん。』

とある。其の中の前の方は、唯圓坊は念佛は申すが、踊躍歡喜の喜びを心の中に起す事がない。之は如何にせしものでせうと心多歡喜の利益に對して疑を起せし結果、斯の言葉を出したものと思はれる。其の時の開山聖人の御答に曰く、

『親鸞も此の不審ありつるに、唯圓坊同じ心にありけり』

と御返事なされた樣に伺はれるのである。實に此親鸞もといふて御出になる。若し親鸞はとあつたならば唯圓坊とお別になりての返事であるに、親鸞もといふので、當しく唯圓坊と同じい即ち唯圓坊の意見に共鳴せられた美しい愛情が表はれてゐる。其の次に曰く、

『よくよく案じみれば天におどり、地に躍どる程に、喜ぶべき事を喜ばぬにていよいよ往生は一定と思ひ給ふ可きなり。』

之は怪しからぬ事である。若し他力といふ事を知らざる人は親鸞聖人の答に對して、不思議を懷くやも知れざれども、此處が他力の不思議を顯はす所である喜ぶ可きを喜ぶは當然なるも、今唯圓坊が信心を得れば、心多歡喜の利益ありとあるに依つて、もつと喜ぶ相なものであるのに、心の底にはさう嬉しいばかりではないが、これは佛の慈悲にもれてしまひはせぬかの不審である。その點をおさとしになつたのである。そこまで不審のたつ樣になつたのは、全く自

力ではない、佛力の御蔭である。若し自分が滿足する程に喜べる時には、聽問が充分に出來たと思ふて、ずつと高慢になるものである。斯くなれば、突き當つたら後と戻りする道理で、折角の御慈悲も忘れるに到る。他力の信心は已れの工夫や力で出來たものでないから、それで今の御言葉に能くよく氣を付けて見れば、『天に躍り地に躍る程に、喜ぶべき事を喜ばぬにて、いよいよ往生は一定と思へ』と仰せられたものと思惟される。これは其次の御言を聞かせ度い爲である。其の次に『喜ぶべき心を抑へて喜ばせざるは煩惱の所爲なり』とあつて、誰も人が防害をして喜ばさせぬのではない。喜ぶべき心を抑へて喜ばせぬのは、凡夫の生れ付の離れぬ煩惱のしからしめる所爲である。觀無量壽經には煩惱賊と言ふてある。我等凡夫は、煩惱といふ盜賊の爲に少々ばかり善事をしても、皆奪へ取られてしまふ。隣りの人は南無阿彌陀佛を一遍稱へるが、我は二度唱へるに故つて彼の人よりも、私の方が勝つてゐると思ふのは全く心

違である。南無阿彌陀佛と稱へる事の出來るのは全く我が力にあらずして、御慈悲深き阿彌陀樣の御手厚き大慈の御念力の御手廻はしである事を深く喜び深く報恩する樣に心掛けねばならない。それを忘れる樣な事では、龍樹菩薩の、

『恩を知るは大悲の本なり、恩を知らざるは畜生と名く。』と龍樹の偈にも說いてある。

さて喜ぶべき心を抑へて喜ばせざる煩惱があつては、往生は出來ぬとあらば大變だのに其の次の御言に、

『而るに佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたる事なれば、他力の悲願はかくの如き我等が爲めなりけりと知られて、いよいよたのもしく覺ゆるなり。』

とあるに依つて大安心である。卽ち私の氣のつかぬ以前から、佛の方では能く知つてゐられるので、煩惱具足の凡夫と仰せられてあるからは、其の明るい

佛の心を此の無明なる凡夫の心底へ貰ひ受けるばかりである。其の上は命のあらん限りは、御冥見に恥ぢ入り恐れ入りて、今日勝手次第に働いて明日の事は知らぬ構はぬといふ風にやつてはならぬ、總て何事でも明日が又あると思ふから慎んでいけるのである。さう云ふ工合であるから能く能く考へて行かねばならぬ。此の煩惱具足の凡夫のために御慈悲の深き、御本願を御成就下された事ぞと思へば佛の大慈大悲が有がたくなるのである。蓮如聖人の「御一代記聞書」に曰く、

『時々懈怠する事あるとき、往生すまじきかと疑ひ歎く事あるものあるべし。然れども〻はや阿彌陀如來を一度頼みまへらせて、往生決定の〻ちなれば、懈怠おほくなる事のあさましや、か〻る懈怠おほくなるものなれども、御たすけは治定なり、有りがたやありがたやと喜ぶ心を他力大行の催促なりと申すと仰せられ候なり。』

自分で自分の懈怠に氣が附く事は少くないものであるのに自分ながら懈怠なる事を氣につく樣な事では、夫れは餘程の懈怠である。さて其樣に自分で氣の付いた時に聽問が足らぬと、往生すまじきかと疑ひ、歎く事がないにも限らんが能く聞かせて頂いて、もはや一とたび、彌陀を賴み參らせて往生決定の後なれば往生は佛の方よりお定め下されたれば、懈怠多くなる事の淺間しや、これは慚愧の心である。誠に早忘れてならんと思つても忘れ勝ちになるのである。然し夫れを苦にして歎くではない。かゝる懈怠多くなるものなれども、御助けは治定なり。我等は懈怠勝ちなれども、佛の方には少しも御懈怠はない。我等は兎角油斷勝なれども、佛の方は決して油斷はない。であるから往生は治定である。ありがたやありがたやと喜ぶ心を他力大行の催促なりと仰せられる。こゝが心多歡喜の利益今迄とは打つて變つて何が御緣となつても御助け下さる事の辱ないと喜びに立ち戻るのである。是れが心多歡喜とて即ち信心をゐた身は

心に歡喜多き境界に至たるといふのである。

（知恩報德の利益）

第八番目に知恩報德の利益と申して、御恩が御恩と知れたならば、默してはゐられない。向ふ樣が禮には及ばないといつても、いよ〳〵、御恩のありがたいといふ事が心底より湧き出るのである。多勢がありがたいと御禮を述べよと催促しても、自分に何の爲にありがたいので御禮を申すのか解せられない場合には、假令形式上に於て御禮を述ぶるやも知れないけれども、心の底からは御禮の言葉は出ないのである。御禮をするのは唯勸めと思ふから何にもならぬ。信心を懷けばこそ自然と佛壇に向ふても御禮が勸められるのである。即ち眞に佛樣に對する御禮の出來るのは卽ち『信心の智慧に入りてこそ佛恩報ずる身とはなれ』の如く全く信をゐてより眞の御禮をなすやうに至るのである。

（常行大悲の利益）

第九番目が常行大悲の利益とて、大悲を實行する事である。如來の大慈大悲が念佛の行者の口にも身にも實地に顯はれる。即ち心の底へ南無阿彌陀佛がしつかりと這入つたならば自然他の人までにも信心を戴いて貰ふ樣に至るのである。是が常行大悲の利益といふのである。

（入正定聚の利益）

第十番目に入正定聚の利益と申すので、開山親鸞聖人の御歌にも、

身は此處にまだありながら極樂の
聖衆の數に入るぞうれしき。

とある。又「和讃」には左の如くある。

『超世の悲願きゝしより、吾等は生死の凡夫かは、
有漏の穢身はかはらねど、心は淨土にすみ遊ぶ。』

とある。いよ〳〵一度彼岸即ち極樂淨土に到つて見れば、いつまでも不寒不熱

の妙境界で暑さ寒さの無い事は丁度春秋の彼岸の氣候の如くであれば、信心決定の人の心の氣候は年中温和で統一されてあるから、いつもありがたやありがたやで日暮しする事が出來るのである。是れが入正定聚の利益といふのである。

第四節　當世の益

必至滅度の利益とは、當來成佛する事である。即ち念佛の行者に於ては、佛の光明に包つまれ、諸佛方の御護りを蒙りての生活を終へて、臨終の夕べに極樂淨土へ往生するや、直に頂く所の御利益をいふのである。滅度とは、梵語の槃涅槃那を譯した言葉であつて『大患永く滅して、四流を超度する』の意である。即ち我等は此の人界にをる間は絶えず汚れた煩惱の惡魔の爲に捕らはれてゐる故、始終苦痛を脱する事は出來ない。いや此の人生ばかりでなく、今が今まで佛の救濟に預かりうる事が出來ず永らく迷の世界に流轉してをつたのも、

依然この煩惱の爲に防がれてゐたからである。されば宿緣當來して、極惡の我ある爲、極善の佛の御法あるを知り、名號を聞信する身の上となりても、人界にをる間は如何にしても絶斷する事の出來ぬのは、是れ全く煩惱の所爲である。一口に八萬四千の煩惱といふが、其數多き煩惱中で、一番惡むべきは無明といふ煩惱である。此の無明の煩惱が根深く我等の心の中に植えつけられてゐる故、徒らに我欲を起したり、瞋恚の炎を燃したり、愚痴をこぼしたり、邪慳驕慢の心を動かしたりして、樣々の罪惡を作りつゝあるのである。佛の光明が我が前にありながら、其の温暖な赫々たる光明を見る事の出來ないのも、亦此の煩惱のあるためである。然るに一朝淨土に參ると、永らく我を苦めた此の煩惱は、全く灰燼の如くに、絶滅し、久しく迷界から迷界へ我を流轉させた欲流、我流、見流、無明流の四つの暴流を超度することが出來るのである。而して大般涅槃の證果を體得して、常樂我淨の四德を具する幸福を得る身となるのであ

る。是れについて一言附隨して述べねばならぬ事がある。それは眞宗以外の宗旨では、往生と成佛とは異時であつて、往生は近果、成佛は幾らかの時間を經て得る所の卽ち遠果である事である。眞宗にては卽ち親鸞聖人の見解では、往生卽成佛といふ說き方なのである。最も夫れも第十九の願、第二十の願の、方便の往生は右の樣には成らぬが、第十八願に順じて眞實の往生を得るは、因が既に圓滿してあるから、果も究竟でなければならぬ。卽ち無量壽經には『橫さまに五惡趣の道を絶ち截り、菩提の果に昇りて、無限の境界と爲ると說いてある。之を善導大師は、橫超との給ふてゐるのである。實に以前にも書いた通り吾人は煩惱を斷ぜざれども、他力信心の得益は、橫さまに惡趣を截り、幾多の階級を一超して、大涅槃の妙果を得るのである。親鸞聖人は之を讃して、『本願圓頓一乘は、逆惡攝すと信知して煩惱菩提體無二と、速かに疾く證らし。

と申された。然れば吾等は信心を得た一念に、現世に於ては正定聚の利益を得命終れば往生即成佛の果を證し、更に己が意樂に隨ひ、穢國に還り來りて、衆生濟度の自在を得る事が出來るのである。此の自在を得るといふ妙果即果德に付いて一言述べると、七高僧の第二の天親菩薩は、此果德を說きなさるゝに付いて、廣くいふ時と略して云時との二つに分類なされた。先づ廣義の場合には佛の果德は即ち淨土の依報正報の二十九種の莊嚴である。狹義即ち略義の場合は、佛の果德は即ち一法句眞如なる果體をいふのであると申された。しかも此の果相と果體は不一不異の關係が結ばれてあるのであつて、丁度水と波とに於けるが如く、水の體を離れて波の相があるのでもなければ、波の相の外に水の體があるのでもないと同じ理由であると申された。故に此の說によりて見ると略して云ふ時から佛の果體を申せば、佛身も佛土も不二である。廣くして云ふ時から申さば、佛身と佛土には判然と區別があると見なければならない。然り而

して今いふ滅度は此の兩方の見方の中何れに屬するかといへば、佛の果德を、一法句眞如の果體即ち略義の方に近いのである。「正信念佛偈」に曰く、

『蓮華藏世界に至るを得て、即ち眞如法性身を證す。』

と申された點から考ひても、正にさうであると信ずるのである。しかも佛の果體と果相は不一不異の者なりと申された天親菩薩の言を親鸞聖人は、同じく「正信念佛偈」に、

『煩惱の林に遊びて神通を現じ、生死の園に入つて應化を示す。』

と申された。されば彌陀の佛名を信じて淨土へ往生せし者は、直ちに眞如法性の佛身を得ると共に、前述の如き己が意樂に隨ひ、穢國即ち此の世界へ還り來りて衆生を濟度するといふ即ち敎人信の實德を持つ事が出來る身分となる事が出來るのである。

因みに述べたきは、淨土眞宗に於ては現世祈禱を斷じて許さない事である。

本當に自分が自分の力で以て修行して、さうして結果を得ようと云ふならば、祈禱といふ事は一番初めに要る。自分が願を起して、斯ふしなくてはならぬといふ心を起し、さうして佛に成ることを目的として祈る。自分の極樂果を祈るといふ事は一番必要になる。それで世界中に祈禱のない宗教は一つもない。皆祈禱があるので、其の祈禱がある爲にどの宗教も惡くなると迷信的の宗教になる弊がある。未來の爲ばかりに祈るのではなくて現在の爲に祈る。病氣があれば祈禱をする。不幸があれば間違の祈禱をする。或は御籤を抽く、方角を見る。吉日を見る。家相を見る。さうなつて來ると底止する所を知らぬ。しかるに眞宗は此現世祈といふ事は勿論の事、未來に對しても祈るといふ事は斷じて許さないのである。前に述べた樣な現世と當來世に於て大利益を得るからは、他佛に追從する事なきは勿論亦現世に於ても、禁厭祈禱の法を用ひず、唯宿世の業に任せて、各自の產業を營み、近く災禍の來らうとするものは自他相互に注意

を加へて之を避け、區々たる禍福の爲に心を動かして、猥りに神佛を煩はす樣なのは、特に淨土眞宗の嚴しく禁ずる所である。それゆゑ昔から、『門徒もの知らず』と申して吉日良辰方位吉凶、自他の病氣に對して咒禁咀祀を用ひない點は局外者の大に怪しむ所であるが、少しく其の理由を述べると、凡そ釋尊の本意は、吾等凡夫をして生死の苦海を越えて、大般涅槃の彼岸に達せしめようといふのにあるのである。然るに生死海中の波瀾に漂はされて、徒らに愛欲に溺れ名利を貪り、業風の度合を强めて、更に浮沈を久しくすると云ふは、愚の最も甚だしいもので、大無量壽經には、『佛敎の潤ふ所は、天下和順、國利民福』と說いてある。

然れば彌陀の本願を信じ未來の大安穩を得るものは、唯佛の敎誡を遵奉して身にはもろ〳〵の惡を離れ、諸々の善根を積み行ひ、心に阿彌陀佛を信じ、口に六字の御名號を稱へるならば、祈らずとても必ず餘慶ありて、阿彌陀樣は心

の光明にて我等衆生を攝め護り給ひ、諸佛方も護り念ぜられ、天神地祇は競うて加護遊ばすのである。されば神佛に對して祈禱や加持は用ひないけれども、常に神佛は佛法の護持者であり、本師彌陀佛の化迹なりとして、大に尊敬頂禮し、深く鴻大の恩德を謝し奉るのである。

以上は吾人が親鸞聖人の敎理を信受奉行するより來る處の利益であるが、其の利益は要するに正定聚たる現世の利益と、必死滅度たる來世の利益の二種であるが、此の二面の大利益があるとして見たならば、吾人は喜び勇々で大悲の彌陀の御心にすがり、大聖親鸞の敎理を守りて是れを吾人日常の行爲の上に顯現することに心がけねばならない。是れ實に他力信仰の特權とする處ではあるまいか。

第四編　結　論

第十二章　眞宗の平民主義

第一節　不二平等の說

我が淨土眞宗は劃一主義であつて平等主義である事は開山親鸞聖人の生涯を一貫せられた主義によつて充分に解せられるのである。卽ち親鸞聖人は精神の佛敎を自分に踏み越えて、モウ形の上の佛法はスツカリ無して了つて、親鸞聖人の主義卽ち皆んな同じやうに行けるといふ平等主義を一律に遣て行く、劃一主義で何も彼も統一して平等に遣て行かうと云主義を實行せられたのである。

卽ち心中ばかりでなく形の上も平等主義で以て一律にする。卽ち僧侶も俗人もないのである。自ら愚禿親鸞と號し半僧半俗と言はれた。法衣を身に纏ふといふも、夫れは單に墨染の法衣が一つあるのみで、實は法衣もなくてよいので

ある。尙又親鸞聖人の時代には現今の樣な立派な眞宗の寺即ち御堂などはなく只說敎場位があつたに過ぎない。法話をなされる場所は今日の俗家と同じ樣な家であつて、親鸞聖人御自身からの考によれば、僧もなく俗人もなく、全く『僧俗平等』僧俗劃一である。故に別に弟子もなく、壇下もない即ち弟子等の關係はないのである。只我は彌陀の本願を信じて人にも信ぜしめるのみで、皆御同行、御同胞である。曾て新しき法門は敎へない。師弟といふ關係はない。『親鸞は弟子一人もゝたず』といつて僧俗に區別をつけず、師弟の階段を作らず、即ち師弟平等の主義を斷行せられたのである。

師弟も僧俗共にない事になると何處も彼處も其主義で行かねばならぬ。劃一主義については法然上人が彌陀の本願で統一せられたやうであつたけれども、尙奈良に行かれて阿彌陀如來の脇侍佛がないので、勢至の像を彫んで置れた事がある。然るに親鸞聖人に至つては、觀音の像や勢至の像は不必要である。唯精

神的の佛法で、彌陀一佛の外に、他の佛に自分の身命を托して救はれるといふことは不必要である。無論觀音も慈悲はあるけれども、拜む必要はない。勢至菩薩も同じく拜むには及ばない。唯彌陀一佛に限る。自分の救はれる佛に頭を下げるより外に頭を下げることはならぬと示された。彌陀の本願を基とする以上は彌陀一佛に限るのである。それで唯彌陀一佛と云ふ事で統一せられた佛體平等である。事が解せられる。

それならは我々が現今宗敎を信じた上の仕事はどうであるかと云と、それは世間の爲になることならどんな事をしても宜いけれども、此佛法の中の我々の仕事といふものは、唯南無阿彌陀佛を唱へるより外はない。それ唱へるのは、唱へなくつては淨土に詣られないと云のではない。救はれた跡の佛恩報謝の爲に唱へるのである『行住座臥念佛せよ』と仰しやつたけれども、それを唱へて詣るのではない。そこで佛體は一佛に劃一せられ、我々の行體と云ものは佛恩を感

謝すると云ふ事で劃一せられたから一點の疑ふ處もなく明白である。即ち行體平等である。それならば我々はそれを信じさせて貰つた結果として、行く處は何處であるか。行つて何になるかといへば、これが又劃一である。若し外の修行を要する形式的の佛敎であつたならば、意志の弱い者は十分に行けない。早く行く事は出來ない。根氣の弱い者は弱い結果を得、根氣の强い者は强ひ結果を得ると云ふ事になるけれども、彌陀の本願に救はれるといふ、即ち他力で救はれると云ふ事になれば、その結果は同じ事である。其の事は自然の順序である。どうなるのであるかといふと、別の者になるのではない。彌陀同體の佛になれる。彌陀と同じ事になる。その結果は彌陀同體で統一せられる。即ち果體平等である。

それから我々が信ずる處は、言はずとも佛の他力で、他力中の純他力である即ち他力信心の信體平等である。それだからして、斯う云ふ具合に段々進んで

來ると云ふと、釋迦如來の形式と云ふものは一切要らない事になる。一切ない事になる。まだまだ世間に行はれて居る形式がある。祈禱をすると云ふ形式がある。形式のある間は劃一だとはいひにくい。祈禱は一種の迷信である。非迷信を立てんが爲に親鸞聖人は祈禱を止められたので、即ち吾人は此處に於て親鸞聖人の明白に統一せられた價値を知らねばならない。

佛敎では『一切衆生悉有佛性』我々は皆佛になれる精神を持つて居ると敎へてある。親鸞聖人の平等主義は釋迦如來の平等主義と同一轍である。只釋迦如來の平等主義は形式を主として四民平等を說き、親鸞聖人の平等主義は精神を主として僧俗同行を唱へられたのである。親鸞聖人は完全に平等主義を實行せられたのである。故に聖人は平等主義、劃一主義の權化であると共に淨土眞宗は平等主義にして且つ劃一主義の宗敎である。

此の平等主義を言葉を換へて見れば即ち平民主義の事を意味するのである。

前にも一寸書いて置いたが、今少し詳かに書けば左の如くである。

『故聖人のおほせには親鸞は弟子一人ももたずとこそおほせられ候ひつれ。其の故は如來の教法を十方衆生に説き聞かしむる時は、只如來の御代官を申しつるばかりなり。更に親鸞珍らしき法をも弘めず、如來の教法をかれも信じ、人にも教へ聞かしむる許りなり。その外は何を教へて弟子といはんぞとおほせられつるなり。されば、ともに同行なるべきものなり。これによりて聖人は御同朋御同行とこそかしづきて仰せられけり。』

又「歎異鈔」には次の如く云はれた。

『專修念佛のともがら、わが弟子、人の弟子といふ爭論の候はん事もて外の子細なり。親鸞は弟子一人ももたず候。其の故は我はからひにて人に念佛まうさせ候はゞこそ弟子にても候はめ、ひとへに彌陀の御もよほしにあづかりて、念佛申す候ふ人を、わが弟子と申す事極めたる荒涼の事なり

つくべき緣あればともなひ、離る可き緣あれば離るゝ事のあるをも、師をそむきてひとにつれて、念佛すれば往生すべからざるものなりなんどいふ事不可説なり。如來よりたまはりたる信心をわがものがほにとりかへさんと申すにや。かへすがへすある可らざる事なり。自然の理に相かなはゞ、佛恩をも知り、又師の恩も知る可きなり云々。』

又「口傳鈔」には左の如くある。

『弟子同行をあらそひ、本尊聖教をうばひとる事、然る可らざるよしの事、常陸の國新堤の信樂房、聖人の御前にて法文の義理ゆへに、おほせをもちゐまふさざるによりて、突鼻にあづかりて本國に下向のきざみ、御弟子蓮位房申されて云く、信樂房の御門弟の儀を離れて下國のうへは、あづけわたさるゝところの本尊聖教をめしかへさる可くや候らんとなかんづくに釋親鸞と外題のしたにあそばされたる聖教多し。御門下を離れ奉る上は定めて仰

崇の義なからん歟と云々。聖人のおほせにいはく、本尊聖教をとりかへす事甚だしかる可からざる事なり。其の故は親鸞は弟子一人ももたず、何事を教へて弟子といふ可きぞや。みな如來の御弟子なればみな共に同行なり念佛往生の信心うることは、釋迦彌陀二尊の御方便として發起すと見えたれば、全く親鸞が授けたるにあらず。當世互に違逆の時、本尊聖教をとりかへし、つくる所の房號を取り返へし、信心を取り返へすなんどといふ事國中に繁昌と云々。かへすがへすしかるべからず。本尊聖教は衆生利益の方便なれば、親鸞がむつびをすてて、他の門室に入るといふともわたくしに自專すべからず。如來の教法は總じて流通物なればなり。しかるに親鸞が名字ののりたるを、法師にくければ袈裟さへの風情にいとひ思ふによりてたとひかの聖教を山野にすつといふとも、其の所の有情群類かの聖教にすくはれて盡く其の益をうべし。しからば衆生利益の本懐そのとき滿足すべ

し。凡夫の執するところの財寶の如くにとりかへすといふ義あるべからざるなり。よくよく心得べしとおほせありき。』

又三代目の覺如上人は親鸞の意を汲んで左の如く「改邪抄」に書いておられる一條に依つても弟子といふ觀念を持つ上から色々の弊害の出來る事が充分に伺はれる。

『弟子と稱して同行等侶を自專のあまり放言惡口することいはれなき事。光明寺の大師の御釋には、もし念佛する人は人中の好人なり。妙好人なり最勝人なり。上上人なりとのたまへり。しかればそのむねにまかせて、祖師のおほせにも、それがしは全く弟子一人ももたず、その故は彌陀の本願を保たしむる外は、何事を教へてか、弟子と號せん、彌陀の本願は佛智他力の授け給ふところなり。然ればみなともに同行なり。わたくしの弟子に非ずと云々。これによりてたがひに仰崇の禮義を正しく、眤近の芳好をな

すべしとなり。その義なくしてあまつさへ惡口をはゝ條、ことごとく祖師、先德の御遺訓にそむくにあらずや、知るべし。』

即ち以上の文を見るに、信心を得るに於ては師弟子といふものがないのである從つて佛前に於ては貴賤貧富の區別のない事が一番よく解せられる。即ち我が眞宗は平等主義平民主義の宗敎である。自然是の宗旨が一番社會に秀でてゐるのである。

第二節　肉食妻帶の說

我宗祖親鸞聖人が法然上人の眞隨とせられた信心爲本の敎義を受て、元祖法然上人のなし給はなかつた肉食妻帶、即ち其當時迄佛道修行者として、一人も爲た事のない、極めて破天荒な、寧ろ他の佛者に對しては脫線的と目さるゝ、肉食主義、妻帶主義を斷行せられたのである。そして淨土眞宗といふ在家の宗風を發揮せられたのである。釋尊が定められたる二百五十戒の戒律の中で、一番

嚴格に戒められたのは、女に接近してはならぬといふ事である。無明が迷ひの根本であるが如く、佛道修行について、第一に碍をするものは愛欲である。であるから釋尊は愛欲を一番强く止めねばならぬと戒めになつたのである。其の事は各經文に多く出でゐる事によつて理解される事であるが、一例をあぐれば「四十二章經」の中に、

『佛言曰く、女色を視る勿れ、亦共に語る事勿れ、若ともに語らば、正心に思念せよ、我は沙門なり、濁世に處するや、當に蓮華の泥の爲に汚されざるが如くなるべし。其の老えたる者を想ては、母の如く、長者は姉の如く、少者は妹の如く、稚き者は子の如く、度脫の心を生じて惡念を息滅せよ。

佛曰く、愼で汝が意を信ずる勿れ。汝が意信ず可らず。愼んで、色と會ふ事なかれ。色と會へば即ち禍生ずと。

佛言はく、愛欲は色より甚だしきはなし、色の欲たる、其の大外なし。幸に一あり、若し二つ同じからしめば、普天の下、能く道の爲めにするものなし。

佛言はく、妻子舍宅に繫がるゝは、苦しみ牢獄より甚だし。牢獄は散釋の期あれども、妻子は遠離の念無し。情愛の色に於ける豈に驅々を憚らん。虎口の患ありと雖も、心に甘伏を存す。泥に投じて自ら溺る。故に凡夫と曰ふ。此の門を透得すれば、出塵の羅漢なり。

佛曰はく、人愛欲を懷いて、道を見ざる者は、譬へば澄水の手之を攪するを致せば衆人共に臨むも、其の影を觀る者有る無きが如し。人愛欲を以て交錯すれば、心中獨り興る。故に道を見ず。汝等沙門、當に愛欲を捨つ可し。愛欲の垢盡れば道見るべし。

佛言はく、財と色との人に於ける、人之を捨てず、譬へば刀刃に密有る、

一餐の美に足らざれども、小兒之を舐れば則ち舌を割くの患あるが如し。

佛言はく、愛欲の人は獨、炬を取りて風に逆つて行くが如し。必ず手を燒くの患あり。

天神の玉女を方佛に献じ、佛意を破壞せんと欲す。

佛曰はく、革囊の衆穢、爾來るも何か爲さん。去れ吾用ひず、天神愈よ敬ふて、因つて道意を問ふ。佛天神の爲めに解説せり。

佛言はく、人有り婬の止まざるを患て、自ら陰を際かんと欲す。佛之に謂て曰く、若其の斷つとせば、心を斷つに如かず。心は功曹の如し。功曹若し止めば、從者都て息む。邪心止まざれば、陰を斷づるも何の益ぞやあらん。佛爲に偈を説く。欲は汝が意に生ず。意は思想を以て生ず。二心各寂靜なれば、色に非す。亦行に非ず。佛言はく此の偈は是れ迦葉の説なり。

佛言はく、人は愛欲より憂を生じ、憂より怖を生ず。若し憂を離れば、何

をか憂へ何をか怖れん。』

以上の樣に愛欲に關する事が頗る多いのである。然るに宗祖親鸞聖人によつて全く其の戒は破られたのである。聖道自力の敎は正法の智者や、賢者に對しては兎も角も、末法濁世の今日に生れし低下の吾等凡夫には相應せぬ敎であるとの事が明瞭に證明されたと共に、惡人正機の他力本願の御敎ばかりは我等造惡不善の凡夫に取りての唯一無二の敎法であるとの旨が判然したのである。

而して聖人の此の決行によつて、法然上人の宣れた『出家は出家のまゝ、在家は在家のまゝ念佛すれば、如來の救濟に預かり得る』との平等の佛心を傳へた御言葉が、在家の者の心に正しく會得する事が出來るのである。いかに元祖法然上人の御言葉があつても、親鸞聖人にして妻帶し給ふ事なくば、在家止住の者は本願に對して疑惑の念が消えなかつたものと思はれる。然るに妻帶の事實あつてこゝに惡人正機の他力本願を疑ふ餘地が無くなつたのである。

然し此の妻帶は、聖人の深き自信力、自覺より出たものに間違ないのである其の自覺とは、即ち我等は極惡深重の者であつて、到底在家止住の生活を離るゝ事の出來ぬ器である。表面は如何に美しく飾るとも、內心は八萬四千の煩惱に苦しめられてゐるのである。聖道自力に敎ゆる戒律は實に淸淨無垢ではあるが、其れを修する我が心は餘りに汚らはしく濁つてゐる。即ち愛欲は我等の本來の性質である。此の樣な自性を持つてゐるものはとても、聖道自力の敎を修行する事が出來るものではない。かゝる自性を備へてゐる、我を御見拔の上で『賴め救はん』と呼んで下さるゝ如來他力の本願に御縋り申すより外はないとの御意から、他宗他門の人々から色々の誹謗や、樣々の嘲笑を受けさせながらも、斷然非僧非俗愚禿釋と名のられたのであると思はれる。然し前にもいつた通り、自信力もあつたのである。夫れは經文の偈によつて自信力もついたものと察せられる。

親鸞聖人は肉食妻帶に關しては、左の三義を立てゝゐられる。即ち、一に類例を尋ね、二に證據を求め、三に道理を辨じてをられる。

一に類例を尋ぬるとは、先づ其の赴きを辨せば、總じて公儀から公事沙汰を聞き給ふにも、先其の樣な例があるかとの御尋ねである。次に證據あるかと尋ね、其の上に其の道理を辨へて、善は善、惡は惡と是非邪正を分ちて道理を盡し給ふ。今も肉食妻帶に付いて三義を立てて解說せよう。

先づ其の第一、類例を尋ぬとは、先法華經、彌陀經其の外の諸經論を譯し王ふ鳩摩羅什三藏は、天竺の龜茲國の人で、親は鳩摩羅炎といへ、龜茲國の王が此の鳩摩羅炎を國師として敬ひ尊び、如何にかして、此の樣な學匠の種を此の國に殘したいと思示して、即ち王の妹を此の鳩摩羅炎に嫁せしめ、其の二人の間に產れなされたのが羅什三藏である。爾るに此の羅什中々の智德兼備の方であつたのである。後秦の符堅の時、龜茲國より呼び迎へ、其の後秦の姚興と云

ふ人、其の時の天子であつて、深く歸依して、羅什は世に類なき僧侶なれば、其の種を殘すようにせよと命じ給へ、十人の妓女を天子より給ふて、肉食妻帶せしめられた事が羅什の傳記にある。爾るに此の羅什諸經を飜譯なされ、滅後に火葬するに、幾度燒くも舌のみ燒けなんだのである。此の樣な名高き僧なれども肉食妻帶し給ふたのである。大論の中に、賢護等十六正士、善思義菩薩、乃至、解脫菩薩等の十六人の大菩薩は、是れ在家の菩薩である。此の十六正士は大無の中にも列ねてあり、即ち文殊普賢に肩を幷べて坐し玉ふ。又此等の菩薩、皆在家にして妻子ある事は、智論に出でゐる。又智論に妙光菩薩の妻を喜德女と名くるとある。又須摩妻菩薩の妻ある事をあらはされたのである。是れ皆歷々の佛在世の菩薩なれども、肉食妻帶にして、在家居士の菩薩である。又阿彌陀經の通讃、西方要決、唯識述記をあらはされた慈恩大師も肉食妻帶であつたのである。以上は主として西天、中夏の例であるが、我朝は如何かといふ

に、奈良元興寺の慈寶、眞言宗の淨藏、雨の僧正で有名な澄憲法師、又は聖覺法師等は皆肉食妻帶の方であつて、佛法興隆の爲に一方ならぬ力のある人々である。以上を考へて見ると、何れの國にも肉食妻帶の高僧が多いのである親鸞聖人の第一人の考で出たものでなく菩提の障りにならねはよしとの御思考から肉食妻帶せられたものである。

二に證據を尋ぬれば、根本雜事毗邊耶律十七比丘に五の食物を許され、其の第四に魚肉を喰ひ、菜に魚の干物を食せよとある。又た四分律六に蓮華色比丘尼猪の肉を以て大勢の大衆を供養せられたとある。又同十に舍利弗中風を病まれた時、佛の仰せにて、五油を用ひられた事もあり、同十四に羅閱祇城の節會の日、國王大臣が五百羅漢に畜肉を進ぜられたのである。又た末利夫人は波斯匿王の后である。是が五戒の中の二戒を破り、八戒の中の五戒を破られた事を未曾有因緣經に說いてある。けれどもそれは人の瞋を止め、人の命を助ける爲

めの犯戒であるから、釋尊も此の樣な飲酒肉食の犯戒は『大德を得るも罪障ある事なし』と御說きなさつたのである。又四分律四十二卷に種々の魚を食ふ事を許されたのである。又同じく、有病の比丘に牛肉を食ふ事をも許された。又同卷に三種の淨肉を許されたのである。又大集經の中、我滅後五百歲に、我弟子たる者は皆肉食妻帶ならん。是れ金のなきときは銀は無價の寶なり。鐵の無き時は鉛が寶なり。無きに順つて漸々に寶となる。八重の無價を說きてたとへ給ふ。即ち正法の時より像法のときは劣り、像法の時より末法は劣り、末法にては無戒名字の名計りの比丘なれども、眞實の心で敎へは其の德を得ると說へてある。又釋尊の背痛の際に、阿難に牛の乳を取らせ、それを御示し給ふて痛が止たとある。又大悲經の中に、末法に成つては妻の手を引て、酒屋から酒屋と遊行して酒肉を食ふ僧もあるだらう。夫れでも供養すれば、舍利弗目連を供養したと同じ樣に、福を得るとある。止觀弘決二に菩薩七十二度の婬欲を行せ

られた事がある。又楞嚴經に、殺盜婬妄の四重禁を誡められたれども、同卷に諸羅漢諸菩薩に對して、當來世に於て、衆生化益の爲に盜にまでなり、たとへ妻を持ち子を畜てなりとも、佛法修行して早く佛道に勸め入れよと說いてある。其の上維日雜難經の中に、菩薩姉を娶るに、一には宿業因緣、二には畢罪三には應當生男女、四には默人姉を娶り疾く道を得たり云々、是皆菩薩の大慈大悲の衆生化益の所以ぞと說いた事もある。華嚴經に和須密多菩薩和須密女といふ善い女と成つて、衆生を化益し給ひ、人有りて此の女を見れば、見佛三昧と云ふ利益を得る。或はさても美しい端正美麗な女であると思ふて手を握れば其のまゝ到佛三昧を得、又口を吸へば即ち愛佛三昧を得ると云ふ事、華嚴經五十三の善智識の下に說かれてある。夫れを此の菩薩一切の男に馴れ觸れて、衆生化益成された。維摩にも圓覺にも其の通り、圓覺には不律儀にして行じて衆生濟度すとあり、維摩には婬欲に即して菩薩をすとある。菩薩の衆生を濟度な

さるゝは、山の奥谷の中にゐてはならぬ。そこで聖人は諸事を在家と同じくして諸共に淨土往生を遂るやうになされたのである。是菩薩の御作略である。涅槃經の會座まで肉食を許され、涅槃經已後は同じく誡められた。舍利弗目連憍曇彌などは最後まで肉食し、佛に先つて入滅せられたに依つて、肉食を以て一生終はられたといはねばならぬ。或は猪頭蜆子六祖、或は釋尊の牛乳を飲まれた事、みな處に順び時に順ふてなされたものであつて、是みな衆生化度なさるゝためである。大論の中二十二卷に或は國土或は時節に從つて、開遮不同とあり或は二百五十戒等の戒品を持つと遮して、又とかせられたもあり、又たゞ開いておいて後に遮すともある。許してなりとも止めてなりとも、色々善巧方便なさるゝは、兎角衆生の機に萬機あるが故に、兎にも角にも、一人なりとも佛遺に引き入れん爲に、或る時は開き、或る時は遮し、或る時は許して再び誡め給はぬ經もあり、或る時は誡めて許さぬ經もあり、其の開いて誡ぬ經は、大集經大

悲經である。又た誡めて遮して許さぬ經は、梵網經、楞嚴經等である。涅槃十八に『衆生の爲の故、或は遮し或は開かずと、又誡めたる處もあり、又誡めて許さぬ所もあり、楞嚴に堅く誡めて、又同經に許してある。許も誡も其れ皆經文にある事なれば、此を是とし、彼を非とするは不調法である。是やうの足らぬ處學問をして見れば、許すもよし、許さぬもよし、一片に片付けるは間違である。錐頭の利なるを知つて、鑿頭の方なる事を知らず、錐には錐の能あり、鑿には鑿の能がある。故に一旦に是を非とするは、惡いのである。總じて物事は一片に片付ては惡い。順風に帆を擧げる事を知つて、逆風に楫を取る道を知らぬといふものである。であるから、敢へて肉食妻帶を笑ふ必要もなく、又不肉食不妻帶主義者を笑ふ必要もない。面々の證據にする事があれば、夫れで兎や角と評判するは、皆文盲取沙汰と云ふものである。それで文殊問經に喩てあるには海を渡る時船に乘るに、其の舟の破れた時は、瓢單、胡蘆を持つて居れば

其に取りついて上る。若し胡蘆のないときは、藤繩になりとも竹になりとも、取付いてさへ居れば沈みはせぬ。取付くものは何でもかまはぬ。何なりとも取付いて上るのが必要である。生死の大海に沈みたるもの此の海を渡るにたとへ肉食妻帶の人を賴みてなりとも、破戒の比丘を緣にしてなりとも、渡ると助るると同じ事なり。其の取り付いて渡る分別をするによつて、持戒清淨の比丘なりとも、破戒肉食の僧なりとも、何を便りにしてなりとも、兎角生死の海に沈まぬ樣にせよと文殊問經にある。

第三道理を立つるとは、總じて菩薩權方便作略といふものは、順に敎へるときもあり、又た逆に敎ゆる時もあり、夫れを一概に心得るは文盲の至りである。そこで菩薩慈悲方便して機を導き給ふと云ふ處である。楞嚴經の六に、我滅後末法に衆生を淸度するに、出家の相計りては出來ない。種々の形ちになりて衆生を濟度せよ、或は居士、或は童子、或は遊女傾城にもなれ、盜人の同類にもな

れ、肉を屠て賣るものにもなれ、いかにも菩薩の衆生濟度には、かくの如く作略なくてはならぬ事なり。是れ肉食妻帶せぬといふは法なり。又肉食妻帶するに依つて、衆生が近付いて佛法に寄り付くなれば、是權と云ふものなり。法と權とのかはりあるのみ。共に衆生を導くものなり。たとへば孟子に所謂嫂が水に溺るゝ時、手を取りて助けるが法なり。常は弟として嫂の手を取る事は法度にして、此が此間の人倫の法なり。爾るに井に落るや、或は淵川へ落ちんとする時、嫂の手を取らぬが法なりといつて、其の急な時手を取らず、助けずんば、夫は虎狼の類であると云ふてをられる。是れ左樣な時は、法を破ても助けるが人倫である。又臣下として主人に杖を以て打ち、足を以て踏むはよくない事である。爾るに時によつては主人の頭をも踏まねばならない。漢の高祖皇帝の時、韓信が齊の國を打ち亡ぼして、高祖に使者を以て申すやうは、我今度齊國を打ち順へたによつて、齊國の假りの王になしくれと賴まさせた時、高祖是

を聞いて、言語同斷の事なり。玉にすることはならないと答へんとされた時に張良側に居て高祖の色を證りて、若し云へ損へされるかも知れぬと思ひ、高祖の足を急に踏み反省を促したのである。高祖は直ちに氣がついて答へられるには、假王よりも寧ろ眞の王にしてやるといはれたので、韓信の使者は喜んで歸國し復命した所が、韓信が頗る喜んで他の國をも征伐したのである。張良にして高祖の足を踏むとは、無禮な事ではあるが、其の際足を踏まなかつたならば、高祖が失敗の返答をするのであつたのである。然れば是れの場合に於ける行動は權道である。我が日本に於ても多くの例證があるけれども、今は此處に略する事にする。

雜寶藏經に、親が水に溺れた時、子が飛びこんで引上げて、足を以て親の腹を踏みたれば、親の呑んだ腹の水は子の爲めに吐く事が出來て、一生を取りとめたとある。常なれば、子として親の腹を踏むは不孝である。然し此の場合は

大孝行といはねばならぬ。是皆道理のある事である。又泥に入りしものを助けるには、我が身も同じ樣に泥に入らねばならない。我身が泥に入らずしては、正に死なんとする人も助ける事が出來ないのである。今五濁の泥に溺れて、愛欲妄念の水を腹一杯飲んだ衆生を助けるには、其の身も五濁の泥に入り、愛妻愛子の水に入らずば救はれぬのである。是吾が宗祖聖人が泥中に入つて一切衆生の中に交り給へばこそ、我々が淨土往生を遂ぐることが出來るのである。

以上の類例證據道理のある所を知れば開山聖人の肉食妻帶には大いに理由があるといふ事が了解されるのである。聖人は單に此の三義のみに依つての自信力ではなく他に一大源因があるのである。それは、勢至菩薩の化身法然上人の御勸めによつてなされたのも一大源因である。即ち六角堂參詣の際に置ける夢告と法然上人の御言葉とが一致してゐたに依つて肉食妻帶遊ばされたのである。

第十三章　眞宗の道德主義

第一節　報恩行業の說

報恩の行業といふ事は善導の釋に『安心』『起行』『作業』の三つの門を立てゝ專修念佛の相を御示しになつた。安心とは正しく往生の業因であつて、起行とは安心から流れ出づる所の一期報恩の經營で、作業とは起行の方法を示したものである。

安心（往生正因）　起行（報恩行業）　作業（起行方法）

此の中、安心起行とは源は本願の三心十念から出てゐる。さて天親菩薩は一心五念と申され、善導大師は全く之れを相承して、安心起行作業と申された。

- 安心
  - 一心……
    - 三信……
    - ○天親
    - ○本願
    - 十念……
  - ○善導
    - 起行
      - 禮拜門
      - 讃嘆門
      - 作願門
      - 觀察門
      - 回向門
    - 作業―(四修)
      - 長時修
      - 恭敬修
      - 無餘修
      - 無間修

本願の三信は、他力廻向の三信心にして、天親菩薩自得の一心歸命の安心である。次に天親の五念門といふは、此の一心の安心から流れ出る起行であつて本願の乃至十念を開いたものである。乃至十念とは、乃至とは多少を包含する言葉で、一聲から十聲乃至終生稱ふる念佛を寛容して乃至十念といふ。此の稱名は畢竟する所口業を以て、我身ながら恐ろしい罪科を抱へてゐる淺ましい者

と感ぜずにはをられない、此の罪惡深重でかつ善根を積み行はない自分を、阿彌陀如來御一佛が、『汝等凡夫よ其の儘で來れよ、別に修行も何にもいらない。惡も心にかけるには及ばない。吾は汝等衆生を濟度せんがために、五劫が間思惟し、永劫が間苦勞をして汝等の代りに苦勞をしておいたから、何も苦をせず其儘で吾の方に來れよ』と御呼下され、且御助け下されるのである。其大きな弘い御恩に對して心底から喜びの餘り其恩德を讃嘆する報謝的の行業であるが、固とより三業相應するもの故、之を聞くときは、身業の禮拜となり、意業の作願門となり、觀察門となり、又法界の衆生と共に手を携へて往生せんと思ふ廻向門となるのである。此の五念門の起業を修する方法が四修である。彌陀を恭しく敬ひ禮拜するのを、恭敬修と名け終身を期して中止せず誓ふて怠らないのをば長時修といひ、五念門を專らとして餘業を雜えないのを無餘修といひ、心〳〵々相續して、餘の念想が間隔を爲ないのを無間修といふのであつて以上の四つ

が四修卽ち作業の事である。此の中一心の安心を往生成佛の正因とするからは、其の後の起業作業は、皆佛恩報謝の經營と心得るのが我淨土眞宗の特徴である。

我眞宗に於ては、一念發起、平生業成と談じて、往生の業因は平生の時から能く名號の義理を聞き、彌陀の救濟力に感化せられて見れば實に多くの時間を要せないで、他力から佛因を成滿して一身の安泰を得、確然とした安心立命が出來る。此の安心決得の時が最早娑婆の終りである。

身は此處にまだ有りながら極樂の
聖衆の數に入るぞ嬉しき

有漏の不淨な身の其の儘で、早くも安養界中の大會衆である。して見ると、再び三界流浪の身でないから、更に成佛の業因を貯へる必要がない。宜しく彼の佛の名を稱へて、鴻大の恩德を報謝すべきである。殊に此の名號は彌陀が因位

の萬行をこめ、果地の萬德を具へて、一切諸佛の智慧藏あらゆる功德の寶庫として成就せられたものであるければ、此名號を稱へるのを報恩としたのが淨土眞宗の定めである。稱名を佛恩報謝の行爲だと定めたのは親鸞聖人御自身の專斷的の定めではない。是は遠く七高僧の第一祖龍樹菩薩の易行品の『人能く是の佛無量力功德を念ずれば、即時に必定に入る。是の故に我常に念ず』とある文に御依りなされたので、此の文意を正信念佛偈に『唯能く常に如來號を稱して應に大悲弘誓の恩に報ずべし』との給ふてゐる。此の報恩謝德の心から稱名念佛する時の我等の心は如何かといふに、蓮如上人の「御文章」に曰く、

『御助けありつる事のありがたさ尊とさよと思ひて夫れを喜び申す心なり』

とある。

本願に三信十念を誓ふは、往生の業因である。況んや彌陀佛の方から報恩を

誓ふの道理があらうかと云ふ疑問が起るのである。實に尤もの疑問ではあるが今は紙數を許さないによつて、能く盡す所ではないけれど、大體は此の樣である。願文の信行は若不生者の果に對すれば三信も十念も因には違ひない。安心より云へば、彌陀の眞實の對して、疑慮なき信樂を誓ひ、行よりいへば、餘行を簡びて念佛を誓ひ給ふ。然し再び考へて見るに、此の信と行とは其の體は異ならない。全く一である。信に行が具はり、行に信が離れない、不離一體が第十八願他力の信行である。であるから疑なき信心の體を求むれば、決して凡夫虛妄の思の心所でない。信心の體は本願成就の南無阿彌陀佛である。是れ卽ち彌陀因位に成就し給へる利他圓滿の大行である。大行を全領した他力の信心であるからして、成佛といふ大々的事業を成就する事が出來るのである。故に善導大師は此の信心決得の所に既に行として成ぜぬものはないと申されたのである。

吾等凡夫の手前に取りていへば、何も行じたではないけれども、實に大行を全領したところの信心であるければ、之を『不行而行』といふて、行じた事になるのである。往因の定まるといふは、もと他力の不可思議力にあることゆゑ吾人の口に念佛を唱ふるを待つて、始めて定まるといふ樣な迂回な事ではない然れば一心に彌陀を信仰するによつて往生が定まるからには、行者は其の往因の定まるのを歡喜し、佛德の宏大無邊にして十方世界に通滿してゐる其の不思議を讃嘆なし、至德の廣大なのを報謝するより外にない。夫れであるから安心決得の口業稱名は一聲といはず、十聲といはず、終身行住座臥に唱へて佛恩報謝をなすべきである。「大論」に、

『菩薩の無量の行願は佛に因を成す。斯を以て恩を知り德を報ずる事は、大臣の大王の恩寵を蒙りて、常に念報するが如くせよ』

と申された源空法然上人は彌陀の願意を顯はして、往生之業念佛爲本との給ひ

たが、決して吾人口稱の功力を頼む念佛ではない。涅槃の城には信心を以て能入と爲すと示し給ひ、信後相續の稱名については『自から天を仰ぎ地に伏して也喜ぶべし。今度彌陀の本願にあへる事を、行住坐臥にも報すべし。かの佛の恩德を』と申された。實に淨土眞宗は他力信心の決定を以て、往生因の完成となすに依つて、必然と結果として、稱名は佛恩報謝の行業となるのである。然るに近頃眞宗の人にして能く間違つた考を頂いてゐる人を時々見受ける事である。その間違とは何かといはんに、南無阿彌陀佛の名號をば我等が極樂淨土に往生すべき正定業であると考ひ違ひしてゐることである。成程念佛は我等が往生すべき正定業の樣にはあるが、是は佛の方からいふときは、即ち名號を稱へるのは正定業ではあるが、救濟に預かる我等の方からいへば稱名は報恩の大行である事を能く辨へてをかねばならないのである。

念佛の信者が如來に對しての報恩の行爲は、稱名念佛する事ばかりではない

勿論稱名念佛は報恩の主要分ではあるけれども、報恩の二字から生み出された信者の行は總て報恩の行である。大體人間の總の行爲を總括して見ると、自分のする行動によつて或る結果を得たい目的の爲に働くのと、他から與へられた恩に對して其れに法ずる爲に働くのと二つある。各階級の人が其の職業に精勵してゐるのは、結果を目的として働く行爲である。又一旦緩急あれば義勇公に奉じ身命を捨てゝまで働くのや、親の御恩の宏大無邊なるに感じて親に仕へる道や、主人の窮地にあるのを助くるのは、目的結果を豫期して働くのではない是全く報恩の爲に働く行である。念佛の信者は後述の即ち目的結果を豫期せないで報恩の考へを以て働いて頂きたいのである。善因善果惡因惡果の因果律に隨ふて第二の行爲は即ち報恩の行爲は、第一の結果を求むるための働と一致する樣になるのである。言を換へて言へば、報恩の行爲は、第一の目的結果を生ずる力を有してゐるのである。おのが職業に精勵するのは、是れ或る利益ある結

果を得るための目的で働く行爲であるのに、何故報恩の大行と一致するかといふと、如來樣の大慈悲に氣がつかなかつた時はさておいて、一度如來の御慈悲に氣が付いてからは、假令目的結果を豫期して働く職業でも、我利我慾の精神を離れてゐる。それ故苦勞を厭ふ事なく、誇る事もなく、大恩に對しての勤と思ひながら、稱名念佛すると共に働く事であるから、報恩の行となるのである。

されば蓮如聖人は御文に、

『譬ひ商をするとも佛法の御用と心得べし』

と申された。私の町に野村善平といふ魚商人がある。毎日の近村へ魚賣に行く際如何なる時でも念佛を稱へながら魚を賣つてあるくので、念佛の魚賣といふ名がついてゐて、村人は非常に敬意を拂つて其の念佛行者の魚を買ふのである此の念佛行者は決して掛値をいつた事がない正直正當に賣るのである。即ち自分の勞力に對しての報酬だけを頂けばよいといふ考からして、必ず一割以上は

もうけないと心に定め、而して一割だけ買つた時より高くいふて一厘もまけないのであるが、買ふ人は僞りないといふ事を知つてゐるものであるから安心をして買ふ事が出來るのである。或時某が此の念佛の魚賣人に何の爲に懸値をいはないのか、又何の利益があつて念佛を稱へるのかと問ふた所が、其の魚商人がいふようには、私は敢て暴利を貪ぼらないのは、眞宗の御敎を聞てゐるからである。稱名をするのは佛樣の御恩が如何にも宏大であつて稱名せずには居られないからであるといつた相である。實に此の返事は感ずべきものだと思はれるのである。又一例をあぐれば、私の師匠であつた所の故淺井秀玄先生（大正四年九月死元眞宗大學の敎授）は總ての行を報恩の大行と心得てゐられた。その事は當時の高岡新報に、『佛最勝寺故淺井秀玄』として三ケ月間程連載されてゐた記事によりて一番よく分明であるから、今は此處で省くことにする。

さて如何なる理由で信後の働作行爲を、みな報恩と心得て行ふのであるかと

申せば、我等を助け給ふ佛は自利々他圓滿の方である故、其の佛心を頂いた念佛信者も亦矢張り自利々他の行でなければならぬ。即ち我等が信心決定したのは自利で、報恩を行ふのは利他である。何故ならば、信者が職業を勵みつゝ稱へる念佛を未信の者が聞いて、宿緣到來せば之によつて、信に導かれ、又信の淺い人は、いよ〳〵以て信を深くする。報恩の爲と思ふ精神で人生の行をつとめるから、奮勵も出來、戒慎もし、其の他、私、公兩方の道德を實行し得ることが出來るのである。而して此の報恩の行業が、やがて信心相續となるのである。

元より他力の信心は金剛堅固の信心であるからして、變動したり減じたりする事はないが、我等凡夫の心は變動しやすいから、懈怠勝にはなる。それゆゑ相續が大切である。蓮如上人は『さい〳〵に信心の溝をさらへて、彌陀の法水を流せ』といへる事ありげに候』といはれた、その大切な相續も結果は報恩謝德

の行を、ゆるかせにいたさねば出來る事であるから、稱名念佛すると共に各自の職務を佛法の御用と心得て業務に精勵せねばならないのである。斯くして報恩の念より行爲をなし、本業に就くと云ふことは、實に我が親鸞聖人の道德主義で、聖人の敎理は、一面からいふと熱烈なる宗敎であるが、他面から云ふと世間一般の道德として是れを敎へ給うたものである。而して夫れが報恩行業となつて現はれたのである。更に進んで其の倫理道德を說く事としやう。

第二節　倫理道德の說

大無量壽經卷下に『佛彌勒に告げたまはく、汝等能く此の世にして心を端にし意を正しくして、衆惡を作らずば甚だ至德なりとす。十方世界に最も倫匹無けん。』といふ文句があります。元來大無量壽經は卷上と卷下の二卷に分れて卷上には彌陀成佛の因果と申して、阿彌陀如來の法藏因位の時、五劫が間思案せられた後で、世自在王佛といふ佛樣の前で四十八願を說かせられたのを始

めとして、兆載永劫の御修行の因に依て十劫の昔に光明無量、壽命無量の證果を開かせられ、極樂淨土を御成就なされた事を精しく說いてあります。又卷下には衆生往生の因果と申しまして、最初に諸有衆生、聞其名號、信心歡喜、乃至一念の正因に依りて即得往生、住不退轉の現益と、必至滅度、證大涅槃の妙果を得奉る事を述べさせられて、其の次に三毒段卽ち貪欲、瞋恚、愚痴の世間の道德に及ぼす障碍と五惡段卽ち不仁、不義、不禮、不智、不信の害毒を書いた二段を以て、人間の道を委細に御說きなされてあります。是が眞宗に於て眞俗二諦といふ中の俗諦門であります。此の眞俗二諦と云ふ言葉は元々眞宗のお經には見えないのでございます。三部經の中には勿論ありませんが、涅槃經や智度論といふ聖道門の論の中にある言葉で、眞俗二諦といふ事は寧ろ他宗の方が餘計に話をするのですが、今日では眞俗二諦といへば、眞宗取切りの法文のやうに思つてゐます。三部經の中で强へて求めれば、大無量壽經に、譬如王

法、又は現有王法王法禁令などゝ說いてあります。親鸞聖人は化土卷の末に法燈明記を引證せられた、其の記の文に佛法王法を眞俗二諦と組み合せてある。卽ち佛法を眞諦門といへ、世間道卽ち王法を名けて俗諦門といふ事になり、本山法主の消息などにも、近古は頻りに此の眞俗二諦の語を用ゐる事となつたのである。されども覺知、存覺、蓮如の各上人樣方の法語などには、多く佛法王法といつて、眞俗二諦の名は見へぬやうである。故に今時に用ひる眞俗二諦の名は佛法王法と見るべきものである。之を一宗開闢の本書と稱する、親鸞聖人の敎行信證一部六卷の書を徵するに、眞宗の組織は眞俗二諦を以て骨子とし、其の眞諦に廢立の二がある。立の眞諦を敎行信證眞佛土の前五卷所明の法義とし、廢の眞諦を方便の敎行信證とし、至眞發願の願と至心回向の願とにより て、之を第六卷の本にあかしてある。其の俗諦に又開遮の二ありて、化土卷本の終、末法燈明記の引證は眞諦を妨げない。食肉帶妻人倫等の行儀を開とし、

遮とは卜占、祭祀、吉日、良辰等の迷信濫行の種類をさとし、化土卷の末に之を説明してある。今の王法爲本とは、其の開門の俗諦より來たものであつて、王法爲本といふ語は、蓮如上人より始まつてゐるのである。そして八十餘通の御文章の中に、眞諦俗諦と仰せられた事は一ヶ所もない。

『殊に外には王法を以て表とし、內心には他力の信心をたくはへて、世間の仁義を以て本とすべし。

又外には仁義禮智信を守りて王法をさきとし、內心にはふかく、本願他力の信心を本とすべきよし、ねんごろにおほせおかれし、

又先づ王法を以て本とし、仁義を先とし、世間通途の儀に順して、

その上には王法を先とし仁義を本とすべし』

などゝ言ふ文句ばかりで、眞俗二諦といふ言葉は全體他宗でいふ言葉である。

ところが外の宗旨でいふ眞俗二諦と今眞宗にいふ眞俗二諦とは、言葉は同じく

も意味は少々異つてゐる。又同じ眞宗でも、七祖の御心振りは少々づゝ異つてゐる。道綽禪師の安樂集などは、眞俗二諦と云ふ事が御所明の座りになつてゐるけれども、此の安樂集の眞俗二諦といふものは、各宗で申す眞俗二諦といふことと同じいので、却つて眞宗の眞俗二諦と違ふのである。此の眞俗二諦と云ふは、

（第一義諦　世俗諦）（勝義諦　世俗諦）（眞諦　俗諦）

など、其の言葉は色々になつてゐるが、涅槃經の御經文のお心持ちでいふと、眞諦とは、眞と云ふのは「マコト」と云ふ事で、マコトといふのは間違はない事である。即ち變らない、動かない、確かな事である。夫れは何を指して言ふのかといへば、眞如法性を以て眞諦とするのである。眞如から現はれた萬象之れを俗諦といふ、我々の五官に觸れる處、見たり聞いたりして此の宇宙間の森羅

萬象、萬象界、現象界の有様が俗諦である。是れは聖道門でいふ言葉で、大無量壽經の佛法、王法と云ふ事を合はせて眞俗二諦と言ふのが眞宗である。矢張り御文章の佛法王法といふ意味合から見ると、我々の眞俗二諦と言ふは、

佛法……眞諦
王法……俗諦

何故かといへば、眞如と萬法とを眞諦、俗諦と申すのは、是はズッと上の方でいふので、夫れをズッと取卸すと佛様の御開きなされた第十八卷の三信十念、此の途は萬古不變であるから眞諦となし、國法などは其の國々で、主權者の意見によつて色々様々に變ずるから俗諦といふ。夫れで眞宗の方では、三信十念のお化導の方は是は動かぬのであるから眞諦門、王法は世界の有様によつて變動するから俗諦門である。例へば教育に關する勅語中の『克く忠に克く孝に』

の言葉は眞諦門で、彼の戊申詔書の『東西相倚り彼此相濟』の言葉は所謂俗諦門である。同じ御勅語でも教育勅語にはさういふ言葉はない。戊申詔書には、『東西云々』といふ事が出てゐるから、御詔書の方は、日本的が追々世界的になつてゐる。即ち變化がある、即ち王法は變化するもので、佛法は變化せないものである。即ち佛道は眞諦門、人道は俗諦門である。

是等の佛道と人道は密接不離の關係がある。破邪顯正抄に、

『佛法、王法は一雙の法なり、鳥の二の翼の如く、車の兩輪の如し。一もかけては不可なり、故に佛法を以て王法を護り、王法を以て佛法をあがむ之によりて上代といひ、當時といひ、國土を治めます明主、皆佛法紹隆の御願を專らにせられ、聖道といへ、淨土といひ、佛教を學する諸僧、忝けなくも天下安穩の祈請をいたし奉る』

とおいへになつたのを見れば、佛法王法は何の防害もなく相資相依するのであ

る。故に『當流の勸化に於ては、強ちに捨家棄欲のすがたを標せず、出家發心の儀をことゝせざる間、農業を力むるものは、力めながら之を行し、官仕を致すものはいたしながら之を信ず。然れば勤むべき諸役を怠らず、限りある公務を忽にする事なし。國に於てわずらひなく處に於て費なし』との給ひ蓮如上人は『當流親鸞聖人の一義はあながちに出家發心の形を本とせず、捨家棄欲のすがたを標せず、たゞ一念歸命の他力の信心を決定せしむる時は、更に男女老少を擇ばざるなり』と說いてある。是を見れば王法と佛法とは順應し行くものである。卽ち表には王法を本とし內心には他力の信心を深くたくはへてゐれば現世來世共に安樂である。王法とは主として何かといへば仁義禮智眞の五常といふ人道の事である。卽ち五常の反對五惡を眞底より愼み五常を守るにあるのである。

佛の說き給ふ經文は丁度明なる鏡の樣なもので、三千年の昔、三千里の遠

方なる印度人の心の惡に染み易く善に進みがたかりし有樣を明にお見せなされてあるが、決して昔や遠方の人の心ばかりではなく、今日の人の心も此の經文の鏡に向へば、只其の明に驚くばかりである。元より佛智は明なる燈火の如く吾人の胸中は無明長夜と喩へて、黑闇ゆゑに闇はとても明に勝つことは出來ない。早く破闇滿願の德を具したまへる光明名號の攝化を信じて常行大悲の現益をも得ば、知らず識らず帝の則に順ふといふ古語の如くに、此五惡の敎訓を守れる樣になるとの事である。併しながら御文章三帖目第十三通には、「夫れ當流門徒中に於て、已に安心決定せしめたらん人の身の上にも、又未決定の人の安心を取らんと思はん人も、心得べき次第は、先外には王法を本とし仁義を先とすべし』と仰られてあるから苟めにも眞宗の法義を聞く人は信不信に拘はらず、尤も注意すべき經文である。

前に擧げたる經文の初めに佛彌勒に告げたまはくとあるは、彌勒は等覺補處

の菩薩と申して、釋迦如來の如くに成佛なさるべき方にて、大經御說法の時は彌勒菩薩と阿難尊者とが對告衆といふて總名代にお相手に出で、お尋ねをしたり、お受をいたしたりなされた。故に此の文句を出される前に、彌勒は總名代ゆへに次に汝等と呼ばせられた。此の汝等の中には私共も皆籠つてゐる。若し能く此の世界に於て心を正直にして心の發動を愼み、惡事をなさぬなれば實に至極の功德にして、十方世界にも無類の者なりとほめ、次の經文に其の無類なる譯柄が書いてある。

『所以はいかん、諸佛國土の天人の類は、自然に善を作して、大いに惡を爲さずは、開化すべきこと易し』

此の世で天上界や人間界の者も、他の佛國に生れた時は、土德として自然に善を爲して惡を作らぬ故に、之を開化さすことは容易だといふのである。然るに今此の世界は、諸佛の淨土とは違ひ、化益の難きことを述べたまふが次の經文

である。

『今我此の世間に於て佛に作りて、五惡五痛五燒の中に處すること最も劇苦なりとす。群生を敎化して、五惡を捨てしめ、五痛を去らしめ、五燒を離れしめ、其の意を降化して五善を持たしめ、其の福德、度世、長壽、泥洹の道を護しめんと。』

五惡とは仁、義、禮、智、信の五常五善に反對せる五つの惡にして、此の惡業の華法として、現在此の世に於て、牢屋に入つたり、種々の刑罰を受けたり、又は富貴なる者が貧窮となり、壯健なる者が病人となる、抔の事を五痛といへ、又未來は其の惡業に引かれて三惡道に入つて、苦惱の果法を受けるを五燒といふ。此の五濁惡世に成佛して衆生を濟度したまふは最も劇しき苦みなりとて、容易なる事ではないといふ。そこで、阿彌陀經にも此の難事を行ずると說いてある。佛の敎化に降伏したる群生なれば、佛の加被力に由て五惡を棄てゝ五善を

持ち、五痛を去つて此の世の福德を得しめ、未來は五燒を離れて度世、長壽、泥洹の道を得しめんとあるが此の經意である。

眞宗に於て、既に述べしが如く十惡五逆の罪人を攝取する本願を說いてゐるに關はらず、斯くの如く王法人道を守れといふのは、本願に對して矛盾の樣な感がするが、決して矛盾はしてゐない。即一念の安心については、極惡深重の我等を正機として救ひ給ふ大慈大悲の大願力を信ずる故、何ぞ我が極惡深重の罪を恐れよう恐れる必要がない。然し後念相續に至りては、人道王法を守るが最も大切で又人間の本分であるばかりでなく「諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛敎」の理に適ふやうになるのである。且つ又眞諦門の力で卽ち佛法信仰の大なる勢力で俗諦門卽ち人道王法を立派に守り得るのである。その一例をあげて見ると、上牧野村といふ所は非常に不眞面目な人が多くあつて、納稅などの成績は一番惡く、いつも稅金の滯納が多いので有名なものであつた。それが

同村の森崎又助等が眞宗の法義を大いに敎へたので、其の村も段々成績がよくなつて來て、今では滯納者が一人もないばかりでなく、村人皆喜んで働く樣になつたのである。尙又其の隣村の朴木村は明治維新頃から二十年頃までは、大層貧乏な村であつたが、彼の傑僧といはれた籔波淨慧師と瀧水薰什師の兩人が此の朴木村にいたつて眞俗二諦の法門卽ち王法爲本と信心本位の敎義について大獅子吼した爲に、村人皆淨土眞宗の敎義が死してからのみ必要と思つて居たのが、現世に於て最も必要な敎義であるといふことが解せられ、其の後は大いに村人が自覺したと見えて、非常に勤勉になり正直になつたので、今では最も豐富な村となつてゐる。村人の中で最も信仰家として尊敬せられてゐるのは村田和七翁や森龜次郎、川西某、其の他非常に多い。彼等は常に念佛を生命として、總ての行をなしてゐるので、從つて世間の事に對して最も忠實にやつてゐるのである。

第十四章　眞宗の信仰の權威

他力の方の信仰は信仰其物が役に立つのである。行であるとか、即ち修養といふ樣なことを待ずして信仰其の物が直ちに非常な用に立つものである。此世に於て、未來に於ても、此の信仰で即ち落付といふものが出來る譯である。其の所が眞宗の大變ありがたい所である。だから何も信心信心を押し立てるのは其處なのである。能く世間の人が眞宗は極樂行の話ばかりで世間の話をせないから眞宗の說法は役に立たぬと云ふ人があるけれども、其の極樂詣の信仰が現世に役に立つのである。何故役に立つかといふと、極樂詣りが出來るといふ自身の心に落付が出來ると、何事が起つて來ても少しも心を動されぬ。自身は佛に助けられる。死んだら淨土へ詣らせて頂くものである。佛の果報を得させて貰ふものであると、心が滿足して、心に一點の不足もない。心の底に何んとも言

へぬ大愉快を感ずる。夫れが世間の事柄をなす、世間の行ひを爲して行く上に非常な利益が現はれて來るのである。修養などゝ云ふ事も其の信仰が基になつて來るのである。即ち自身が佛力一つで大果報を得させて頂く事が出來るといふ大安堵を得る事になると、即ち此の自身の出て行く先に大きな道を目の前に見る事の出來る狀態になるのであるからして、外の事に就ては暗い事があらうかは知らぬけれども、然し死んで何處へ行くのであらうと云ふ事になると一點の疑惑も要らない。直ぐ目の前に大きな道が横つて居るやうな鹽梅式に考へられて實に大安堵心を得るのである。其の大安堵心が世界の事に反射して出て來るのであるから、世間五十年の世渡をするといふ上に於て非常な變りが出來て來るのである。どう變りが出來て來るかといふと、今述べた通り心の底に大安堵がある。其の大安堵から一種の喜びの心といふものが生じて、即ち未來に對して非常な樂しい希望を持つと云ふ事になる。夫れが即ち今生の上に非常な

力が出來る。子供も同じ事である。明日は遊山に、明後日は劇場につれて行つてやるといふ樣に、明日明後日といふ未來に對して大希望を持たせて行くと、どんな仕樣のない子供でも、どのやうな六ケしい卽ち平生ならば直ちにきらう樣な仕事をいへつけても、ハイハイといふて言ふ事を聞く。何故其の樣な事になるかといふと、未來に對して大希望を抱くのであるから、現在の事は何處までも樂んでする事が出來る。吾等も其の通り未來に對して大希望を持つと云ふ事になると現世に於て大丈夫な心が起る。のみならず大に其處に奮發心と云ふものが起つて來る。親鸞聖人の九十年の間の佛敎的活動といふものは如何にして起つたかと云ふと、此の未來に對する樂しい大希望の反射から來たのである中興上人蓮如樣の八十年間の衆生濟度の御苦勞は、矢張未來に對する大希望があつたからで、未來に對する大希望といふ事が今日現在の仕事の上に大變な力を得ることであらうと思ふ。夫れを佛敎の味合を知らぬ人であつて見ると、我

〳〵は死んだら消いて行くものであるといふ人が多いけれども、未來に對してそんな桔淡寂寞な考へを起して行つたからといふて、決して現在の仕事の上に於て少しも奮發心の起る譯のものではない。夫れも極めて修養を積んだ人ならばいざ知らず、然らざる人卽ち普通一般の人ならば、未來に光明を認めない事では到底現世に於て立派な勇氣が出て立派に仕事を仕上げる事の出來るものではない。他力の信仰を得た人は、六十歲七十歲にならうが、死ぬまで未來に對する大希望心から愉快に仕事をなし行く事が出來るのである。自然未來に大希望を得させて貰ふと云ふ事になつて有難いと感じたなれば、心の底からどうぞ御恩報謝が致したい、お禮を申したいと云ふ事になる、命のあらん限り根氣の續かん限り働く事になる。其處で信仰と云ふものが現代の上に非常に力をなして行く事になるのである。卽ち未來に對する大安堵が現在の上に反射して現はなて來る事になる。けれども信仰の中心は何處にあるかといへば、矢張り現在に

あるのではなく未來にあるのである。未來は佛にさせて頂くと云ふ處に中心がある其の中心から放つ處の光りが現在を照す、夫れが御恩報謝といふ事になつて、現在の上に大變力を得て來るといふ事になつて來るのである。其の力は時としては、百萬の貔貅銃炮劍戟の力も及ばぬ事がよくある。であるから戰役の時などに軍人にして、此の力を得れば、所謂昔からよく云ふ『鬼に金棒』といふ道理で、非常な強い大きい力となる。日淸戰爭日露戰爭近くは日獨戰爭に於ける我軍のめざましき活動の結果大勝利を得たのも、多分は此の信仰の力即ち未來は佛にさせて頂くといふ大希望心が加つてゐるのであると思はれる、元來我國持種の日本魂も、信仰性質のものである上に、彌陀一佛に信任する、眞宗の敎の力を加へた時は、實に錦上耿を尙ふるものであつて、無限の權威とならねばならぬ。難攻不落の旅順口の、終に我が手に這入つたのも、此の方面にあつた兵は、眞宗の最も多く繁昌してゐる北國の出身者であつたければ、眞俗二

諦の訓誡を守り、國恩と佛恩を兩肩に擔ひ、死を視ること恰も歸るが如く、大安慰即ち未來に大希望を頂いて戰ふた力であると聞き傳へて居る。信仰の權威は國家をも社會をも動かす事が出きる最大なる魔力といつてもよい位な、非常な大きい强い力のあるものである。古來無信仰者が信仰力の如何をも知らず、無謀に宗敎の信仰を奪はんとして、徒に苦勞し終に不慮の慘禍に羅つた例は澤山ある。日本歷史に眞宗信徒の一揆としてあるかの石山寺の戰爭に於ける、信長と本願寺との事に徵しても解せられる事である。賴山陽外史が石山本願寺の顯如上人が僧侶卽ち僧衣を着する身を以て、鬼をも挫かんばかりの勢力ある織田信長に、十有餘年間對抗し降參の旗を立てなかつたのを不思議に思ひ終に信仰の力……他力信仰の力といふ事を悟りて、

濃蹶峽顚孰抗衡　梵夫獨不樹降旌
豈圖右府子軍力　難拔南無六字城

といふ詩を作られた。いかにも織田信長が齊藤龍興を井口城に攻めて之を陷れ龍興を逐ふて美濃國を略取し、今川義元を桶狹間に擊つて之を滅されたが如き實に勇悍無雙なる働き振りであるければ、彼の長袖者である顯如上人は、一擊の下に敗亡を取るのは當然の理であるのに、反つて長い間相對抗して負けず劣らず遂に降參をせなかつたのは實に不思議である。信長の軍は天下の剛の者のみを集め武器は總て完全な鋭利なものばかりを使用して彼の鋤や鍬や或は棍棒の樣な殆んど長信の軍隊の持つてゐる武器を防ぐ事さへ出來ない武器を持つてゐる軍を降參せしめる譯にゆかなかつたは全く一つの大きな理由があるのである。夫れは外でない、石山城は唯石や土ばかりで築きたてのではなく、其の基礎は全く南無阿彌陀佛ばかりで、卽ち南無阿彌陀佛をよく聞きわけてゐる、金剛堅固の信心を以て築きあげた六字城である。右大臣信長公の千軍萬馬の力で拔けなんだのは當然であると山陽外史も他力信仰の權威勢力の偉大なる事を

是認した詩である。實に信仰の力は佛樣の力である。智識がいかに進んでも、智識の力にては信仰を奪ふ事は出來ないのである。然し信仰にも色々ある。自己の爲めに佛を利用するが如き信仰は、妄信であるから最大の權威はないのである。至心信樂己を忘るゝ底の純粹他力眞宗の信仰は信仰界の王である。此の信仰といふものが基礎になつて、世間の事も立派にして行く事が出來る。此の世間の倫理道德といふ事も、宗敎の信仰といふものが無かつたなれば其の實行と云ふ上に力を得る事が餘程六ケしい。其處らが學校で修身といふ事を頻りに言ふて居り、倫理と云ふ事を幾ら說いても夫れだけの功能がない譯である。所謂宗敎といふものを丸で突き放して世間の上の倫理道德といふものを說いても實行の上の實力を得ぬ。そこで幾ら口で仰山相に饒舌つて見た處で敎へて見た處で中々功能は現はれにくい。で修身とか倫理とかを敎へるにしても、宗敎的信仰があると實行が伴ふてくる。殊に眞宗の信仰、眞俗二諦の敎義、王本爲本

の宗旨の信仰があれば、尙更世間の事も充分に行へ得るのである。卽ち眞宗の信仰の權威は絶大無限なものといつて良ろしいのである。

さて通俗眞宗の教義と題して眞宗に關する大體を記し終つたのであるが、しかし紙數に限りある爲に充分に詳しく書く事の出來なかつたのは實に遺憾とするところである。

通俗眞宗の教義 終

大正六年十月十二日印刷
大正六年十月十八日發行

通俗眞宗の教義

定價金壹圓參拾五錢

監修者　南條文雄
著作者　青木得忍
發行者　東京市本郷區元町二丁目二十二番地　石田彦三郎
印刷者　東京市小石川區雜司ヶ谷町五十六番地　高嶺繁太郎
印刷所　東京市小石川區雜司ヶ谷町五十六番地　高嶺堂印刷所

發行所　東京市本郷區元町二丁目廿二番地　中央出版社
振替口座東京壹五七八〇番

文學博士　南條文雄先生著

佛教人生觀

菊版　金壹圓八十錢
送料　金拾錢
製本　布箱入

人とは何ぞや　是れ實に千古の一大問題なり、此至難の問題を解決せんが爲に生れたるものは本書なり　本書は佛教界の明星として江湖に渇仰せらるゝ南條博士により平易明解に闡明せらる、混沌たる思想界此の名著に接し闇中一道の光明を得たりと云ふべし　迷ふ者、怖るる者、苦しむ者、惱む者、疲るゝ者とを問はず、苟も生活の眞味を知らんとするものは速に來たつて本書を繙け！

本書は日蓮主義の普及を以て、畢生の天職とせる日生猊下が、該博蘊奥の思想を洗錬なる金玉の文字に顯し、高遠幽邃なる日蓮の眞精神を何人にも消化し易き縱縱横に說破せらる、言々悉く日蓮の思想たらざるなく、句々悉く是れ吾人が迷雲を一掃せらる、現今世界の近狀は吾人に本書の精讀を促すや切なり！

大僧正　本多日生猊下著

日蓮主義研究講話

菊版　金壹圓料
送料　金拾錢
製本　布箱入

本書は、失望の爲に、逆境の爲に、弱行の爲に、薄志の爲に病身の爲に煩悶懊惱する者に唯一の離脫法を示す、而も確乎たる信念と健全なる常識を養ひ、以て健忍不拔なる不斷の精力を得せしめ、人生の葛藤を截斷するに容易ならしむ、即ち森茫たる人生の大海に指針となり轉迷開悟の關鍵たるなり！

東洋大學長　大內青巒先生著

自ら救ふ力

菊版　金壹圓參拾錢
送料　金拾錢
製本　布箱入

江部鴨村先生著

法華經の眞理

菊版　金壹圓四拾錢
送料　金拾錢
製本　布箱入

法華經が世界第一の聖典たるは世既に定論あり、然るに吾人未だ其眞骨頭を捉へ得たるを聞かず、著者鴨村先生法華經の研究に心を潛むる事十年、古來學者の未だ曾て道破せざる處を論及し一章一句の裡前後一貫せる系統を摘發して組織的新解釋を試みたり、而も解說頗る平明、一讀法華經の眞理を掌握するに容易ならしめたり。

文學博士　三宅雪嶺先生の文集

三宅雪嶺格言全集

菊版　金壹圓四拾錢
送料　金拾錢
製本　布箱入

本書は學界の碩學者宿として、德望一世に高き雪嶺博士が深遠なる思想と雄大なる學識を以て處世實行の要訣を說き、當代青年を激勵啓發する最上の活教訓を示す、則ち家庭に、教育に、處世に、修養に、凡そ人事の百般處世の萬般說いて悉さゞるなし請ふ現代の先覺者たり儒者たらんとせば須く本書に依て省察を得せらるべし！

文學博士　南條文雄先生監修

通俗眞宗の教義

菊版　金壹圓四拾錢
送料　金拾錢
製本　布箱入

眞宗は我國宗教界の最大權威にして他力宗の權化たり、本書は其教理と宗祖聖人の行蹟を平易に且つ組織的に說述せらる、即ち他力信仰の極致を味はしめ、生死出離の妙趣を展開し、安心生活の眞意義を體得せしむ眞宗に隨喜する者は勿論苟も佛教を研究せんとせば本書を棄へざるべからず、本書は實に眞宗の萬般を網羅せる千古不磨の活聖典たるなり。

大僧正　本多日生猊下著

法華經の心髓

菊版　金壹圓四拾錢
送料　金拾錢
製本　布箱入

法華經の心髓は即ち是れ一切經の綱要にして、復實に宗教信仰の歸趣なり、法華經の眞義に導かるべき日蓮主義の信仰意識は此書に於いて遺憾なく指示し闡明せられたり、講述頗る平明、解說も亦懇到なり、苟も日蓮主義の正系道統を得て、正明なる信解に生きんとする人は速に此書を精讀せらるべし

夏目漱石先生の傑作集

漱石文集

菊版　上製　金壹圓八錢
定價　金料
送料　金拾錢
製本　布箱入

本書は漱石先生の傑作集とも云ふべきもので、著者が作中の雄編は本書一卷に在り、而も本書一卷の精讀は著者が名著の全部を涉獵するの觀あるべく、讀者は一旬一讀愛吳愛々深く自ら卷を捲ふ能はざらしむ、請ふ世界的大文豪の逝せし後世の名著を愛讀珍藏せられん事を！